
憤悶のアリアドネ

矢暮終之丞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憤悶のアリアドネ

【Nコード】

N4624D

【作者名】

矢暮終之丞

【あらすじ】

主人公羽間正太郎は、可憐で儚い天然系美少女、神谷美咲を終末思想的テロ集団『新世ええじゃないか』の魔の手から救い出す。しかし正太郎は彼女に大変な場面を目撃されていた。

果たして正太郎はこの危機を脱することが出来るのだろうか？

そして彼女の目的とは？

『不鍵合症』という末期的伝染病が蔓延した世界で起こるサスペンス&アクションギャグ。

序：悪意のメモリー

序

十二月二十三日。

宵の口の十九時を過ぎると、身を突き刺すほどの凍て付いた風が、豪勢な住宅地の谷間を矢のように突き抜けてきた。港町のガス灯をモチーフにした街路灯は悲鳴のような高音を奏で、家路に着く者達を各々（おのおの）の砦へと追い立てていた。

この辺りは、海側の都市部から割とマイナーな鉄道路線で繋がれている。そのせいか、知名度のかなり地味な駅名が連なっている。狭い道路幅。無理に鉄道路線を敷いた為に起きる、開かずの踏み切り。一般的には「一方通行か」「迷路か」と見間違えてしまうほどの情景がそこにある。

それを除けば、閑静で住み易い場所だった。コロコロとリンゴが転げ落ちるように、急勾配の激しい傾斜角がスキー場のゲレンデにも似た坂道を形成する。その上の方から重い物力ゴをぶら下げた婦人達が、慣れた調子で自転車のブレーキをキイキイ鳴らし下ってくる。

時には車も行き来するが、こんな狭い道なので、めったにお目にかかる事はない。まだ夕陽が沈む前には、子供たちも「ケンケンパ」と言いながら「案山子遊び」をしたり、縄跳びをしたり。中には地べたに座り込んで、ちびたチョークでお絵かきを楽しんでいる女の子も見受けられるほど――。

軒を連ね、道幅いっぱい商品^{のき}をせり出して売る八百屋や魚屋の威勢のよさに、道を通る誰もが振り向いて品定めをする。時には、

昔懐かしい紙芝居の青年が大荷物を載せた自転車で、大仰に挨拶をしつつ通り過ぎる。

そんな所々に存在を誇示しているせせこましい商店街も、すぐに渋滞してしまう交差点も、住めば都。それぞれが住人達の心の中により良いスパイスとなつて紡つむがれている。

片桐須美かたぎりすみの自宅は、そんな地域の外れにある高台の高級分譲地に存在した。

その場所は背の高い木々に囲まれ、近くにはさる学園の校舎が建ち並び、東京の高級住宅街と横浜の港町の空気が一樣に味わう事のできると噂される、風光明媚な住宅地として名を馳せていた。

父の片桐道夫かたぎりみちおは、三十年前に小さな広告代理店を立ち上げて、コソコソと基盤を築き上げてきた。その甲斐あつてか、今や会社は首都圏に五支店を構えるほどの成長を遂げていた。

鉄筋二階建ての6LDKは父道夫の自慢だった。リビングには薪を使った煉瓦造りの暖炉。山奥の民宿を思わせる囲炉裏端。キッチンとリビングの間には、趣味としか言いようがないミニチュアカウンターバーが存在する。

父、母、妹と、家族のそれぞれが八畳間クラスの自室を持っている。一階の広間から外へ抜けると、芝の手入れの行き届いた広い庭も存在する。そしてその一隅には、須美の十二才の誕生日に仔犬として連れて来られたゴールデンレトリバーの“雷蔵くん”が待ち構えている。

須美は高校二年生である。学園生活も良好で、既に三学期にはイギリスへの短期間留学が決定している。

その、明るくて屈託のない笑顔は学園内でも陰ることはなく、二年生でありながら、同級生下級生はおるか、諸先輩方からも羨望の眼差しが注がれているほどであった。

彼女にとってこの十七年間は、まるで燦燦さんさんと照りつける太陽の日差しのようなもの。永遠に陰ることを知らない恒久的なもの。天の恵み。選ばれた者にしか与えられない僥倖けうじやうと思えた。

そう、あの忌々（いまいま）しい事件が起きるまでは――

絶対領域。家族の聖域。いや、彼女の心の最後の領域。それが打ち砕かれた時、すべての永遠が崩れ落ちた。それは、目の前の赤々とした暖炉の薪の燃えかすよりも儂はかなくて脆もろいものだった。

一体誰がこんな事を。一体誰が何の恨みがあつてこんな事を――
何べん悔いようともその事実から逃れる事は出来なかった。ただそれだけ。たつた一度の事実があつただけ。たつたそれだけですべてが狂い出した。

その事件がもとで家族全員が一步も外へ出られなくなった。足音に怯え、時に聞こえる怒号に耳を塞ふさぎ、窓枠から投げ付けられる石つぶてから身を守るようにして過すごさねばならなかった。

今まであれだけ恩恵をくれた父、母、そして可愛い妹にさえ迷惑をかけてしまった。

だけどそれはあたしが犯した過ちなんかじゃない、あたしが望んだものなんかじゃない――

須美は世界中の悪意に犯され続けていた。

少し足を延ばせば、東京との県境を示す一級河川がゆつたりと流れ、都会のよどんだ空気をも清々しいものに変えていた。

彼女は、小学校に上がるか上がらないかの頃に自転車に乗れるようになった。その前は“ミカちゃん”というキャラクターのロゴとイラストの入った補助輪付きの自転車が宝物だった。

が、母方の祖母にあたる群馬のおばあちゃんが、入学祝いと称して気の早いプレゼントを贈ってきた。そのせいで、それから毎週のように父と河原の特訓をするハメになった。なんとプレゼントは、子供用の高級マウンテンバイクだったのだ。

しかし、彼女はありがた迷惑だなどと一度も思わなかった。もうすぐ生まれてくる新しい家族にもお姉ちゃんとして格好の良い所を見せたかつたし、八月に上京を約束しているおばあちゃんにも、元

気に格好良く乗りこなしているところを見せてやりたかったからだ。父は、彼女をつやつやした髪を、弧を描くようになでながら言った。「ママは毎日病院で、須美の妹を産むために一生懸命頑張っているんだぞ。須美は一体何が出来る？」

須美は襟元で二つ手に束ねたおさげ髪をゆらゆらとはずませて、意気揚々と答えた。「逆上がりができるようになる。自転車にも一人で乗れるようになる」

「お手伝いの方は？」

「うん、もちろんお手伝いもするよ。お勉強もする。お洋服も自分でたたく枕もとにおいて寝る。だから――」

「だから？」

「早くママに帰ってきて欲しい。ママに帰ってきて欲しい」

彼女はそう言いながら、父の太い腕に寄りすがりピョンピョン飛び跳ねた。父は複雑な笑みを投げかけて、より一層須美の頭をなで回した。

須美の母は、生まれつき体が弱かった。その分、妊娠五ヶ月を過ぎる頃になると、入退院を繰り返す生活が続いていた。

父は何かと不憫^{ふひん}に思い、若くて頼りがいのある家政婦を雇っていたが、須美の心を満足させるまでには至らなかった。その満たされない思いが、幼い須美の芯の強さを育んでいった。その気持ちだけが彼女の意欲を掻き立てていた。

いきなり補助輪なしのマウンテンバイクは恐怖に値した。乗り心地は“ミカちゃん”の時とは雲泥の差だった。不安が体中を取り巻いて、足の裏から冷たい何かが込み上がって来るのを感じていた。右にも左にもすかすかとした風が舞い、須美の寂しく縮みきった心の中をあざけり笑っているかのようにだった。

それでも彼女は、転んでも転んでも起き上がった。葉っぱの苦い味と涙のしょっぱい味が、起き上がるたびに訪れた。やがて膝小僧がすりむけて血が滲^{にじ}み出した時、涙が勝手に流れ落ちてきて止まらなくなつた。そんな時は、父が一生懸命駆け寄ってきてハンカチで

膝小僧を押さえてくれた。

「もう少しだ。大丈夫。須美になら必ず乗れる」

ようやく父の手が離れ、補助なしでバランスを保てた時、今までの痛みより、寂しさなんかより、頬で風を切る爽快感のほうが続いていた。父は、遙か遠くの後ろの方で何やら意味不明の大声を上げていた。が、須美には何を言っているのかさっぱり分からなかった。けれど、手を大袈裟に叩き、ターザンのように体いっぱい雄叫びを上げて喜びを目一杯表現していることは、河原にいる誰もが理解できた。

彼女はよろよろとよろめきながら、雲の上にも上ってゆくような気持ちだった。

これでママに会える。ママが帰ってくる。可愛い妹を連れながら。これでまた、パパとママと、私と一緒に暮らせる。そして新しい家族も一緒になって――

根拠はどこにもないけれど、それが彼女の願いだった。そうすることですうなると信じていた。まだあどけない、幼児としての理屈も邪念も何もない、強い信念のような願いだったのだ。

だから印象に残っていたのかもしれない。だから深い記憶の底に残っていたのかもしれない。こんな状況に陥るまで。今生の別れを惜しむ間もない、

（こんな最後の最後の瞬間まで――）

それが、彼女のこの世に生きている上での、跳ね返ってきた記憶の断片だった。次の瞬間、氷のように硬く冷え切った刃が首筋の辺りを通り過ぎた。片桐須美は、どす黒い恐怖に怯えながら、悲鳴を上げることさえ許されなかった。十七年間生きてきて、二番目に不幸で、二番目に恐怖した瞬間だった。

彼女は、誰にも言いわけを述べる間もなく、絶望の悲しみに暮れたまま、一瞬にして絶命するしかなかったのだ。

1：はかなき少女

1

クーラーが文明最大の利器、と豪語していた頃が、とても信じられない季節になっていた。上空から舞い降りるビル風が、骨身に沁みるほど痛烈に感じられた。

墨色に煙草の灰を散りばめた空。東京の厚化粧に、大ミミズを這い蹲^{つくば}らせたかの如くのさばる首都高速道路。その間を、冷えて固まった豆腐の四角形が雑草のように逞^{そひ}しく立っている。

さすがに夜半過ぎともなれば、明日の日本を担う大量の荷物を背負った大型車どもが、あれやこれやと高速道路の路面を削りにやってくる。

サラ金に追われ、夜逃げ同然で北へ向かう者。

未来の夢を託されて製造された、硬くて冷たい鉄骨の山。

未だ国も生い立ちも名前もはつきりしない、明後日の晩御飯。

一台一台の車両たちが、それぞれの目的を果たさんが為に、猛スピードでタイヤを鳴らしつつける。

そんな中、一台だけ仲間はずれな格好をした、小さく鋭い光があった。その光は、周りより一段と低い位置にフロントガラスを有し、頭上は金属ではなく黒褐色のくたびれた合成シートの屋根で覆われている。

おまけに独特の流線型は、ゲコゲコ夏の田園に盛んなウシガエルを思わせる愛らしい風貌があり、いまだき流行らないリトラクタブルヘッドライトが、またそれをひと際愛らしい生き物のように思わ

せてくれる。しかも、ところどころ剥げかかった紅しょうが色の塗装が、なんともクラシカルではないクラシックカーを演出している。その紅しょうが色のウシガエルくんが、大ミミズのうねりを思わす首都高速の上を右往左往するたびに、無差別級レスラーのようなトレーラーどもの横をすり抜けてゆくのである。無論、あまり自由の利かないレスラー共は気が気ではない。しかし、丁寧にはザードでお辞儀をされるものだから、とうのレスラー共も何食わぬ態度でそれを見送っていた。

紅しょうが色のウシガエルは、外回り環状線を東から西へと抜け、汐留を過ぎると左車線 横羽線 へと合流した。夜もとつぷり更けた丑^{うし}三つ時である。昼間とは違いラクラク的車線変更だった。

横羽線に入ると、すぐ左側に素敵色に彩られたレインボーブリッジへの分岐があるのだが、そんな飾りに目もくれることなくウシガエルは直進する。まるで潮気を感じさせない、ビル群の激しい大波に揉まれながらも……

「そろそろ、いいかな？」

紅しょうが色のロードスタータイプを自在に操る男は、助手席にそつと声をかけた。車内には、ボーズ・タウン・ギャングの『キヤント・テイク・マイアイズ・オフ・ユー』が流れている。が、さも隣の客人を気遣うようにして、FMの音量は抑えられていた。

「もう話してもいい頃だよね……。君がどうしてもあんな危険な所にいたのかぐらいさ」

男は出来るだけ優しい口調で言った。座席が二つしかない小さな車だけに、天井の幌がバタバタと唸って騒々しい。しかし、彼の意図するものは、彼女に確実に届いていた。

「居場所……」

少女は、震えるような小さな声で言った。

（居場所？ なんだいそれ？）

男は、喉元まで出掛かった言葉を押し戻した。いや、返す言葉に

詰まったのだ。

私立東横浜女子学院、二年A組『神谷美咲^{かみやみさき}』十七才。そう生徒手帳には記してあった。言わずと知れた神奈川県屈指の名門校である。この生徒手帳は、現場で拾ったものだ。

少女は、二時間程前に終末思想的デモ集団『新世ええじゃないか』の大作の騒ぎに巻き込まれそうになっていた。この男は、その狂気の演目の舞台から、彼女をさらうように助け出したものである。それは少女の心身ともにおける蹂躪^{じゅうりゃん}の一手手前。間一髪の出来事であった。

「若いうちはいろいろあるからね。俺もそうだったよ。未だに探してるもん、自分の居場所。……ああ、自己紹介がまだだったね。俺は羽間正太郎^{はなましょうたろう}。今は横浜の小さな食品会社で商品開発みたいなことをやっている。でも驚いたよ。君みたいな女子高生が夜中に制服のまま、あんな連中の前にふらふらと出て行っちゃうんだからな」

「ゴメンなさい……」

「い、いやいいんだ。だけど参ったよ。君を助け出したはいいいけどあの連中……、今度は俺にターゲットしぼりやがって。ほれ、この通りベルト千切られちゃった。クーツ！ 思い出だけでもゾツとしちまう。あのアゴ野郎……」

男は、深緑色のテラードのジャケットの裾をまくり上げ、悪戯っぽい笑いと共に、少女にウエストの裂けた部分を披露した。

すると、

「ゴ、ゴメンなさい！」と、少女は恐縮したように肩をすぼめ、顔を赤らめた。

「い、いや君を責めてるんじゃないんだ。危うくトラウマになるところだったってこと。だってさ、君だって俺みたいなのがさ、あんな奴に、あんな大男に……その……なんだ、や、犯られるところなんざ見たくはないだろう？」

「は？ はい……絶対見たくないです」

美咲はコロコロと笑った。襟元から二つ手に結わえた栗色の長い

髪が、しだれ桜の細枝のように小刻みにゆれる。今までの深刻きわまりない夢想の表情が一変すると、甘酸っぱい艶やかなオーラが狭い車内いっぱいに拡がった。

突如、正太郎にあられもない緊張がほとばしる。

（じよ、女子高生……！）

そう、隣に乗せているのは正に、女子高生。

自らと一回り以上年齢が離れた、水晶のように光り輝く年代である。纏うオーラは夕日の煌めき、檸檬の香り。厚手の山吹色のジャケットは重厚な金ボタンで鎖とぎされて、丸みを帯びたシングル襟にお洒落なハンドステッチが可愛らしく光る。ちらり覗かせる純白のブラウスは、何ものにも換えがたい青春の証し。

一輪の胡蝶蘭を模したブローチ。その高貴なる校章に束ねられし赤きリボンは、スパイシーなハーブのように鮮烈極まりない料理を引き締めてくれている。さらに、ねずみ色のツイード生地で作られたプリーツのスカートが、清流の如き脚線美を、いかような怪しげな者どもからも護るようにして妖しく魅せる。

しんがりにして最たるは、彼女自身の容姿そのもの。御顔ははたまた仏蘭西人形にも勝るとも劣らぬ程の美貌、端正な芸術品。

彼自身どうして今まで平気でいられたのか、摩訶不思議でならぬほどの「ドギマギ」が全身に襲い掛かってきた。

「あ、ああああ、……あのさ。横浜でい、iiiiいんだよね？ 送って行くところ」

「えっ？ あっ、ハイ」

「どどどどど、どこ？」

「えっ？」

「よよよ、横浜のどど、どこ？」

「……？ 元町の辺りです」

「ふ、ふうーん、やややや、やっぱりいいところのお嬢様なんだ？」
「そんなでもありません……」

美咲は笑顔を止めた。

正太郎は何かまずいこと聞いてしまったかと思い、さらに焦った。
「何が好き？」

「えっ？」

「いやあの……ほら、歌手歌手」

「あつ、ああ、アーティストですか？　なら、ちょっと古いけど『GLAY』かなあ」

「ああ……あー、グレイね。あの目がでかくて、魔女スティック
なんか関係しいてるとい……」

「えっ……？」

「あつ！　あーっ、あつちのグレイね」

「あつち？」

「いいい、いやいいんだ。勘違い勘違い、へへへへへへ」

「へんなの……羽間さんて、ウフフフ」

一度、翳^{かげ}りを見せた彼女に、笑顔が戻る。正太郎は、なんとなく
結果オーライに救われた。

（このへんで、話をもどさねば……）

彼は、雰囲気がよくなったことをシメシメとばかりに、もう一度
あの質問をした。

「あ、あのさあ。美咲ちゃん。君、なんであんなところにいたの？」

「えっ？」

「あ、い、いや。やっぱ気になるじゃない？　だって間一髪だった
んだよ。それに制服だし……。大人の夜の街、あこがれの街『銀座』
に女子高生が独りフラフラ出歩いてるなんてやっぱ気になるじゃな
い？」

「……………」

美咲は黙り込んだ。案の定、仏蘭西人形は曇りガラスに閉ざされ
てしまった。

「そ、そうかあ。話したくないかあ。うんうん。しょうがないなあ。
まああるさ、誰だって。話したくない事のひとつやふたつ。俺だっ
てあるもんな、数えきれないくらい」

「でもさ、君だってもう大人なんだからわかるだろ。あの『新世ええじゃないか』って連中は最悪だ。社会科の授業なんかで習っただろ。江戸末期の『ええじゃないか』騒動とは似て非なるもの、まるで違うつて。江戸時代の『ええじゃないか』は討幕派が煽ったつて噂もあるけれど、あれは大衆の鬱憤と明日への希望が混在して起きた、ただの馬鹿騒ぎさ。だが『新世——』に限って言えればあれは破滅主義そのもの！ いや、破滅そのものだよ。『不鍵合症』が世界中に広まって、子供が少なくなつて、どの国も国力が落ちて、老人が増えて、このまま行ったら勿論人類自体が危うい、否、滅亡のカウントダウンが始まっちゃうととしてるつてときに、突然うじ虫が湧き出るみたいに『ええじゃないか』とか言つてランチキ騒ぎさ。裸になつて踊るならまだしも、淫らな行為や破廉恥極まりない行為をして。挙げ句エイズやいろんな伝染病なんかを撒き散らして。近寄れば関係ない人まで巻き添えだ。中には自殺までするやつがいる。そんなのが何千人とデモみたいに行進するんだぜえ。確かにもう世紀末は過ぎたけれど、世も末だよ。ノストラダムスだつてびっくりさ。それに、世の中にはどうやつて生き延びようか熱心に研究開発している人たちだつているつてのにさ。……そんなところに君はフラフラ出て行つたんだ。もう少しで君は取り返しのつかない事になつていたんだ。もうちょっとその、なんだ……、自分を大切にした方が、いいよ……」

正太郎は喉が熱くなつてしまつていた。まるで、心の導火線に憤然たる炎が燃え移つてしまつたかのように。

もつとも彼はこの瞬間、怒りと同時にとても後悔をしている。ああ、やつぱりこんなこと言ふんじゃなかった、と。

——三十路に乗りかかると、どんな男でも説教臭くなるつて悠里に言われたもんなあ。そんなんじゃ、若い女の子に嫌われちゃうぞつて言われたばかりだもんなあ——

そんな事が彼の頭の中を過ぎる。相変わらず少女の心は、曇りが

ラスの窓を閉じたままであるし。

しかし、意外にも二の句を告げたのは美咲のほうだった。

「あ、あたし……」

美咲はうつむき加減に目をつむった。

車窓からは、つる草のように生えた工業地帯の雑多なプラント群が、汚れた光に燦られるように映し出されている。少女に痛々しい思いが込みあがってくるかのように。

正太郎は、彼女の思いが声帯に届き着けるまで、全休符をきめこんだ。

その時である――

「殺して……殺して、あたしを殺して、羽間さん！」

美咲は突然ふって沸いたように大声をあげた。表情は鬼気迫り、まるで活きのいい白魚が跳ねんばかりの小さな手は、正太郎の左腕をギツチリと握り込んでいた。

キメ細やかな透き通った肌が嫌というほど接近している。星屑を散りばめたような美しい瞳が嘘偽りのない台詞であることを物語っている。いたいけな少女の心が何らかの物質を投げつけたかのように伝わってくる。

それでも正太郎は視線をフロントガラスから逸^そらさなかった。そして、少女の意外な要望にも動揺を見せるでもなく口をひらいた。

「何を言っているの？ 変なこと言わないでよ」

正太郎はカラカラと笑い飛ばした。

「お願い羽間さん！ あなたしか出来ないの、あたし害人間なの！」

美咲は力強く言い返す。

しかし、

「害人間？ なにそれ」と、正太郎はそれを一蹴する。

「とばけないで、あたし害人間なのよ！ 地球の害なのよ！ あたし見たの、あなたがあの人を殺しているところ……」

「――！！」

「あたしたちは死ねないの、自分で死のうとしても死ねないの！」

殺されようとしても自殺しようとしても、何かが邪魔をして死ねないの……」

美咲は両掌で顔を押さえ、ワツと泣き出した。

「美咲ちゃん、変な冗談はよしてくれる？ 命の恩人ていうか、君の貞操の恩人ていうか、とにかく、君を助けたこの俺に言う台詞としてはちよつときついなあ」

正太郎は、苦笑いを浮かべた。そして、思い出したかのようにシートの間から缶コーヒーを二本取り出すと、左手で彼女の頬にひよいと押し付けた。

「飲みなよ」

正太郎は、もう一本の缶コーヒーのプルタブを片手で器用に開け、一気に喉の奥へ流し込んだ。「クウーッ！！ ギンギンに冷えてるぜ」

彼女は、気温でキンキンに冷えたコーヒーを押し当てられ、心なしか冷静さを取り戻した様子だった。まるで綿雪のようにキメ細やかな白い頬。そこをつたう一筋の涙には、春どけのせせらぎの如く一片のくもりさえも感じられない。

美咲は、心の冷却が進むにつれて、言葉が溢れ出るように口を開いてゆく――

「どこかで聞いたことがあるの。……死なない害人間を簡単に殺す事が出来る人達がいる。その人達は地球にそう易々と存在しない。でもすぐ近くにいる。そしてこう呼ばれている。『無碍むざいの人』と……」

彼女は、缶コーヒーを両掌で優しく抱きこむと、そのなめらかな頬にあてがった。

「ふうん……なら聞くけど、美咲ちゃんがその『害人間』とやら、だったとして、どうしてそんなに死にたがるのさ。なんだか……もつたいない」

あくまでフロントガラスを見つめながら、正太郎は受け答える。「害人間は悪魔の子供なんです、きつと……。この一年の間に、世

界中の人の間で赤ちゃんができなくなっちゃったのだって、きっとあたし達のせいなんです。世の中の人たちがおかしくなっちゃったのだってそうかもしれない。……聞こえるんです。みんなの悪口が……いいえ、世の中の悪意そのものが聞こえてくるんです。毎日毎日、いいえ、いつでもどんなときでも……あたし、そんなの耐えられない……」

美咲は腕を抱え、ガタガタと震えだした。「それだけじゃない、それだけじゃないの。あたし達の悪意が現実となって現れるの。今夜だって……」

「今夜だって？」

「今夜だって人を一人不幸にしたわ。あたしがあんな事思ってたばかりに……」

美咲は、顔を手で覆ったまま動かなくなった。

正太郎は、怪訝な眼差しで彼女を問いただした。「あんな事って、どんな事？ 言ってみてくれるかな」

「羽間さん……怒らない？」彼女は両手をゆっくりと外すと、小声で答えた。「でも……絶対に怒ると思う……」

「なんだよ、俺が何を怒るって言うんだい？ 君に向かって怒る理由なんてないさ。さあ、言ってごらん」

正太郎は、美咲に向かってニツコリと笑った。

「う、ううん……じゃあ、言うね。絶対に怒らないでね」美咲は上目遣いに正太郎を見ると、もったいぶった様子で一呼吸おいた。「実はね……、あたしが殺させたの……羽間さんに。あの人を……」

「は、はあ！？」

正太郎は突拍子もない声を上げた。「な、何言っちゃってるの？ そんなわけ……大体俺は——」

「あるの！ あの人害人間だったわ。あたし分かるの。自分が害人間だから。あの方は、最近になってあたしを追い回していたの。電車に乗るときはいつも同じ車両に乗ってきてこっち見てるの。あたし気持ち悪いからソッポ向いてたらいきなりそばにやって来て――」

「お嬢ちゃあん、いい子だから僕ちゃんの。。。になりなあ。でないと僕ちゃん、ここの乗客みんな。。。して。。。に。。。を。。。っちゃうからなあ。えへへへへ」——って言ってきた、あたし何言ってるのかちつとも分からなくて、でもすごく不愉快に感じてつい、こんな人殺されちゃえばいいんだ。。。なんて思ったの」

「で、それでもあの人がつこく付きまとうから、とことん逃げたわ。——京浜東北線から東海道線に乗り換えて、品川で降りてまた京浜急行で川崎まで戻って。。。また京浜東北で秋葉原まで行って山手線に乗り換えて。。。渋谷に着いたから人ごみに紛れたんだけど、どう言う訳が見つかったちゃって、慌てて銀座線に乗ったの。すごく怖かった。だって相手は害人間、害人間は死なないの。相手もそれは知ってたみたい。だってあの人、歩道の信号が赤でも平気で渡って来てあたし目掛けて走って来るの。ただでさえ人ごみは悪意が聞こえ易いの、どうしたらいいか分かんなくなっちゃって。。。銀座はあまり詳しくないから逃げるだけ逃げていた。。。そしたらもうボロボロ涙が止まらなくなっちゃって。。。頭の中が突然くらくらして。。。貧血起こして倒れこんじゃったの。——そしたら羽間さんがやって来て。。。あいつを後ろから。。。」

美咲はゴクリと唾を飲み込んだ。そして、あるうことが、ガクリと。。。と、死人の真似をしてうなだれて見せた。

「ち、ちょ、ちょ、ちょ、ちよつと待ってよ美咲ちゃん。何だよそれ勘弁してよ。俺を人殺し呼ばわりするのやめてくれる？　いくらなんだって酷いよ。俺は君を助けた恩人なんだぜえ」

正太郎は、ようやく美咲の目をマジマジと窺^{うかが}った。

「そうよ、羽間さん。あなたはあたしを助けてくれた恩人。そして今からあたしを殺して、この苦しみから解放してくれる大恩人になるの」

「そ、そんな無茶苦茶な！」

「言い逃れしたって無駄なんだから。。。。だってあたしが羽間さん

に助けてもらうのは、あたしの悪意。筋書き通りなんですもの」

「な、なんだって？」

とうとう正太郎は、声を裏返えらせてしまった。

「ごめんね羽間さん。あたし、あるスジの人から『無碍の人』の噂を聞いたとき、これは使えるって思ったの。だって悪意が現実になつて現れるなら、あたしの悪意そのものを利用すれば死ぬことも出来るし、望みも叶うつて。だからあの変質者と追いかけてこしたつてわけ。でも怖かった。『無碍の人』が現れなかったらどうしようかと思っちゃった。……でも現れた。あたしは『無碍の人』にアイツをこの世から追い払ってもらおうと念じてた。そしてその悪意は現実となった。それなら次は、現れた『無碍の人』にあたしを殺してもらおう事。でも、ただ望んだのでは現実にならない。だから知り合いになつて直接頼んじやおうと、あのデモ行進に出て行つたわけ——あの『無碍の人』を『ええじゃないか』に巻き込んでしまえ……てね」

美咲は、また正太郎の左腕をグツとつかみ、彼の頬に息がかかるほどの距離まで接近した。

「ねえ、いいでしょう？ 殺して、殺して、あたしを殺して、お願い！ 減るもんじやないでしょう？ お願いだから、羽間さあん、殺してくれないと羽間さんを悪意で呪っちゃうんだから！」

突然、彼女は発作を起こしたかのように喚き出した。正太郎は、ハンドルを握り締めていた左腕をいきなり半端ない力で揺さぶられたものだから、

「おわっ……！」

ガクンという衝撃とともに、有り得ない急角度にハンドルを切ってしまった。当然ステアリングがあさつての方向にぶれて、ウシガエルは一回転二回転と独楽ユカのように回り出した——

「うああーっ！」

「きゃああーっ！」

紅シヨウガ色の彼の愛車は、タイヤを勢いよく鳴らしまくった。

トコロテン突きのような道幅の狭い首都高の壁が、目の前に迫り来るが如く襲いかかる。この時、法定速度を上回る時速百二十キロで走っていたものだから、勢いもタイヤの起こす白煙も並大抵ではない。

正太郎は、明日の新聞記事をイメージした。

『深夜の首都高大惨事！ 女子高生拉致男死亡』

正太郎は、明日のワイドショーの見出しをイメージした。

『破廉恥！ ロリコン男 女子高生拉致……挙げ句大事故！』

正太郎は、今週の女性週刊誌の表紙をイメージした。

『無謀運転少女地獄！ 異常男と魔の深夜ドライブ 美人女子高生の制服逃亡劇的二十五時！』

正太郎は今月の……（以下省略）……とにかく、ありとあらゆる大量のイメージが一瞬にして駆け巡った。正太郎はこのまま死ねば、まず自分が悪者になってしまう事は間違いない、とNASAのスパコン並みに解析した。

それは、光が地球を七周半するあいだの出来事だった――

「どおおりやああーっ！ 負けてたまるかああーっ！」

スピンし三回転半したウシガエルの車体は、斜めになったまま後ろ向きに横滑りしている。百万人の女性が悲鳴したようなタイヤの擦れる音が辺り一帯にこだまする。高速道路特有のジョイントに当たる感触が車中にも伝わってくる。

正太郎は、まず状況を確認した。

（近くに他の車はいない）

（ここは緩いカーブが続くが、幸いランプ>高速道路の出入り口くない）

（起伏も激しくはない）

（タイヤは無事だ。バーストはしていない）

（車体が軽いから転がるかと思ったが、音からすればグリップは十分だ）

「いける！！」

正太郎は本能が示すままギアを落とし、アクセルとブレーキを小刻みに踏み、車体が滑る方向と逆ハンドルを切った――

見事だった。否、奇跡だった。ウシガエルの車体はいつの間にか何事もなかったように体勢が立て直されていた。トコロテン突きのようないやらしい壁に少しも擦る事無く前進していた。

「た、助かった……」

正太郎は、思わず胸を撫で下ろした。

だがしかし――彼は納得がいかない。

急激な血糖値の上昇と、アドレナリン分泌過多により今更になって動悸が激しくなっていた。今更になって恐怖が押し寄せてきたのだ。

「ハア……ハア……ハアハアハア……」

これというのも、とんでもない女子高生を助けたおかげで……と後悔が彼の頭の中を過ぎる。羞花閉月しゅうかへいげつよろしく、誰もが羨むほど魅力的な女子高生は、とんでもないプツン娘（死語）だったのである。

しかし、この一大事を巻き起こした当の本人はというと、さすがに恐怖に耐え切れなかったのかシートにぐったり気絶しているのである。

「殺されたがっている割には、かなり怖がりみたいなんだよねえ……

…さて、どうしようかね、この娘。現場見られちゃったんだよねえ」
彼はとりあえず、高速を降りてゆっくり考えることにした。

まさにこの時の正太郎には、後悔先に立たず、というフレーズが耳元に聞こえているような気がしていた。

2：検問と正太郎（一）

2

正太郎は、むっつりと口をつぐんだままカーラジオを聞いていた。時折、右手の人差し指で鼻の横を搔いてみては、またハンドルに手を置いてリズムを取る仕草をする。これは、彼の考えがまとまらない時の癖なのである。

「もうひとつランプ（出入り口）を過ぎたら、高速を降りてみるか

……」

“生麦”と文字の書かれた表示看板を目で追いながら、また結論を先延ばしにする。

彼は、助手席で横たわる少女の寝顔に目をやると、フツと鼻笑いをし、また指先で鼻の横を搔く。

「この俺が……こんな娘に、現場を見られていたなんてな……」

愚痴を二言三言口にして、また溜め息を吐く。先ほどからこれの繰り返しだった。

気が付くとハンドルを握る右手がひどく湿っている。ぬるぬるとした汗で濡れた手は、正太郎の心をひどく表したものである。彼は、納得のいかない表情でかぶりを振ると、エアコンの吹き出し口にそっと手を差し伸べて、不安な気持ちと一緒にそれを吹き飛ばす。

彼にとってのこの夜の雰囲気は、ただならぬものである。

何故なら彼は、未だかつて殺しの瞬間を他人に見られたことがなかったのだ。それが、通行人の視線が飛び交うようなスクランブル

交差点のど真ん中であつても、テレビ中継の生本番の最中であつても、彼の異能をもつてすれば、周りに殺しの瞬間だと認知されることはなかったのだ。

当然、そのような場面での殺害は危険性が伴うので避けているが、それだけの確たる自信はあつた。

「なのに、どうして、こんな娘に……」

正太郎は、後悔と自省の念に苛まれながらも、新たな選択を余儀なくされていた。

（確かにあの時……この少女が『新世ええじゃないか』に巻き込まれているのを放っておけば、こんな葛藤もせずにいられたはずだ。だが、俺は彼女に殺しの瞬間を見られていた。そしてそれに気付いてしまった。それが許せなかった。どうして彼女が殺しの瞬間を感じてしまったのかの理由が知りたかつた。だから、つい助けてしまったんだ。なのに、あんなわけの分からん妄想が理由だつたなんて……）

たった今、地元のFM局から流れていた軽快な音楽が止み、午前二時ちよどの時報が知らされた。この時間帯なら活動している人は極端に少なく、人目に晒される危険性はかなり低い。

正太郎にとつての厳しい選択が、刻一刻と迫りつつある。

（俺は、この少女を殺さなくてはならないのだろうか？　こんないたいけな少女を葬らなくてはならないのだろうか？）

幾度となく自問する。しかし、この神谷美咲という少女が本当に殺しの瞬間を目撃していたのであれば、早急に手を打たなければならない。

無論、彼女の不確定な言い様を逆手に取って口裏を合わせることできる。しかし、このまま葬ってしまうば、確実に口封じができる。この夜の出来事を口外される危険性は格段に減る。だが、どちらを選択したとしても、それなりの代償を伴うのは火を見るよりも明らかなのだ。

とはいえ、それを迷っている時間はもうない。これからどうする

のかを先送りばかりしては、隠蔽に最適な時間帯を通り過ぎてしまふ恐れがある……。もし彼女を葬る選択をするのであれば暗いうちがいい。しかし……

さすがに今夜は、銀座界隈での大それたデモ騒動があつたおかげで、交通量はより激減している。この少女を始末するのであれば、正太郎にとって絶好のチャンスと言える。

彼は、先ほどからバックミラーで逐一後方から来る車両の有無を確認していたのだが、“大師”の出入り口を過ぎた辺りから、あまりヘッドライトの光を感じていなかった。首都高速の状況を示す電光掲示板に、さほど重大なサインが出されてなければ、前方に交通規制もない。

この状況は、あの大所帯のデモに警察官が総動員で借り出された副産物なのである。『不鍵合症^{ふけんごうしょう}』という得体の知れない病が蔓延するようになってからこのかた、人々は少々投げやりな精神状態になつてきている。

その精神状態を示すように、『新世ええじゃないか』などという狂気のデモ集団を生んでしまった。

警察官とて人の子である。『新世ええじゃないか』に参加し、勤務をおろそかにしてしまう輩がいてもおかしくない状態なのだ。あのイカれたデモ行進が行われる夜は、慢性的にどの職場においても人手不足に陥っているのである。

殺るなら今しかない――

彼は、少女の首筋にそつと左手を差し向けた。まだ完全に成熟しきれていない少女の体は、生まれたての子猫のように無防備だった。純白のブラウスから這い出ている首筋が、生々しい白い光を放つ。

この少女は一体何者なのだろうか？ この少女は本当に殺しの現場を見たのだろうか？

もしかしたら、金欲しさの強請^{おどろ}なのだろうか？ 若さ故の血気に満ちた冗談なのだろうか？ それとも狂信的思考に支配された、新手の妄想信者なのだろうか？ それとも――

彼の困惑した思考は、未だ様々なケースを考慮した上で、複雑なラインを描いている。出来る事なら殺したくはない。あの一件と関わりのない彼女に、何の恨みもない。

しかし、社会的位置をそれなりに確立している彼の生活で、これほど危険な存在はない。まして、今現在、その位置から転落するわけにもいかないのだ。

（俺には……悠里がいる）

心中は、全く灰色に混じる事のない葛藤を繰り広げていた。にも拘^{かか}わらず、かの少女は、ぐったりとしたまま安らかな表情で眠っている。彼女の白く透き通った肌は、ぽつりぽつりと高速道路に備え付けられている照明によって反射し、まぶしい光を放っている。すうすうと安堵の寝息をたてるたびに、絹のように滑らかな長い髪がさらさらと波打って跳ね上がる。健気に缶^缶コーヒ^ーを握りしめた指が、大理石のように涼しげな匂いを解き放っている。

見れば見るほど美しい――

まったく邪念を感じさせない彼女のオーラは、汚れきった正太郎の愛車のシートに似つかわしくなく感じられた。

（惑わされるな、羽間正太郎！ このまま彼女を闇に葬ってしまったら、今夜の大失態は全て無効になる。それでケリはつく。この少女もそれを望んでいたではないか――）

極論こそ得ていた。たとえここで人ひとり殺したとしても、何事もなく偽装するなど今さらどうと言う事はない、と。しかし……

外傷や他殺の痕跡を残さずに殺害する。そして、死体は何らかの理由で事故にでも巻き込まれたかのように偽装する。それが彼の手口。常套手段。完全なる生活の一部。

これまで、他人様にばれた事などたった一度もない。今までやって来た事を鑑^{かん}みて、全く問題はない。こんな娘一人を始末するなど、息をするより簡単な事ではないか。

だがしかし――

「いかなる場合であっても、本末転倒だけは絶対にならぬ……」

と、自らを戒めるのが、羽間正太郎たる自我の拠り所であった。

彼は、八年前の某日に起きた“未だ忘れえぬ事件”からこのかた、並々ならぬ死線をくぐり抜けて来た。その苦難の道のりの最中、自らが保身のためだけに人殺しをするという、卑劣かつ、愚劣な行いは、一度たりとしていなかったのである。

苦難の道のり——しかし、それはなにも、戦々恐々とした血へドロにまみれた荒野を、右往左往し、銃や弾薬を担いで駆け巡ったという意味ではない。まして、あらゆる修験者のように、日進月歩、日々精進しながら、山野を駆け巡りつつ無我の境地を見出すような荒行を重ねてきたわけでもない。ただ、この現実社会の、もつれあった糸の中を、思うがままに駆け巡ってきただけなのである。

人はいつか、必ず死ぬ。黙っていても、必ず死ぬ。

羽間正太郎は、そんな世の中の普遍の道理に、少しずつ手を加えてきた、だけなのである。

しかしそれは、並の精神力では維持できぬ諸行であった。

人を殺す……という、まこと荒み^{すさ}きつた悪行が、この御時世、親子の間でさえ造作もなく行われてしまう悲しい時代である。であるがゆえに、他人様の命を絶つことが、まるで虫けらを殺すように、まるで飼い猫の毛皮に取り付いた蚤虫を潰しまくるように、いとも簡単に行えるものだ と誤解しがちなのは、素人の浅はかさを意味している。

同類を殺す。人を殺せる。という心理は、時として精神崩壊を生む結果を意味している。これは、法律や戒律のような、あとづけの理屈なのではなく、人類が理性というものを維持するようになる前から、同種族を絶滅させまいとした何者かによって、ことごとくインプットされた、いわば安全装置のようなものである。

その禁忌を犯しながら、平然と、平然としたように見せかけながら、法定的な社会で生き抜くには、ありとあらゆる試行錯誤がなければ、この忌まわしき因縁の荒野を駆け抜けて来られなかったというわけだ。

ことさら、守られた——守られる事が当たり前になった当時勢においては、なおさらの試行錯誤が必要とされる。それを、生きた見本として、標本として行ってきたのが、羽間正太郎の生き様であった。

時には推理小説や、サスペンス小説にある精神異常的な登場人物をお手本として、精神生活を試みていた事もあった。時には戦時書物や、犯罪ノンフィクションの当事者の心理を読み取り、手本とする日もあった。だが、それは彼にとって、ことごとく違ったケースでの標本であり、全く役に立つものではなかった。

しかもそれらは、正太郎の意義に反していた。何故なら、彼の標的たる人物たちは、他人の心身を蹂躪した……そして、愛する女性を悩まし続ける犯罪者であつたからだ。

無論、犯罪者ならば、司法や警察に依頼し裁いてもらえるほうがいい。

しかし、正太郎に対を成した犯罪者どもは、警察や検察などの手が及ばないものたちだらけなのである。さりとて、裏社会が関与するような黒々した権力の圧力でもなく、国家間のどろどろとした抗争に由縁を持つものでもない。なんというか、ただ、念入りに絡められた暴虐な罠に苦しめられている……という、全く掴みどころのない思惑に巻きこまれている状態なのだ。

そして彼は、ただ、自分たちに害を与える者どもへの『唯一無二の抵抗』として、やむを得ず“人殺し”をしなければならなかったのだ。

そういつた意味で、正太郎には教授されるような師匠的位置の存在は皆無であった。だから、一日一日の心理経緯の積み重ねで、心の充足を補うしかなかったのだ。

たった今の、この時もそうである。

表向き三十路に足を踏み入れた年齢になり、八年間という殺しを伴う裏の生活の中で、初めて出会う衝撃。そして戸惑い。これは、何ものとも計りあうことのできぬ堪えがたい葛藤であると言える。

その葛藤に打ち克つには、どんな死線を越えてきた彼の経験則を使用したとしても、

「至難の業である……」

というわけである。

そして、この羽間正太郎が、いたいけな少女——神谷美咲を、もし、死に追いやってしまったとすれば、彼自身の理性の堰はことごとく切れてしまっていたであろう。

それはすなわち、

「俺は単なる殺人鬼になっていたのかもしれない」

という岐路でもあったのだ。

そう。そういう事すべてにおいて、彼自身が一番危惧している。

それゆえに、正太郎は心穏やかではいらなかったのだ。

だから今、十七歳のこれからの少女——神谷美咲の、未成熟で美しい寝顔を見るたびに、正太郎の太く生えそろった逞しい眉根が、ゆったりと下ってゆくのである。

（そうだ……、あの事件の時。悠里と出会ったときが、彼女の誕生日……十七才だったんだよな……。全く……俺ってヤツは、どうしてここまでの事をやってきたのか、危うく見失うところだった。そういう意味でこの少女は……。感謝しないといけないな……）

また、鼻先の横を右手の人差し指で搔いて、反省する。

と、しかし、その人の心を取り戻した事を喜ぶ反面、捨て置けない事実もある。

（でもな。……彼女が言う“害人間”っていうのは、一体何のことなんだ？ さすがにさっきまで取り乱していたからな。俺は美咲ちゃんあの言葉を、若気の至りの妄想だと受け取っていた。でもな俺の異能の瞬間である殺意に気付いたともなると、これは尋常じゃない。予測……というか、“念じていた”から知っていたって事が、もし本当なら……もはやこれは馬鹿にした出来事なんかじゃない。でも、そんな事が本当にあるものだろうか……）

異能を持つ者は、得てして、他の異能者の力というものを受け入

れがたく感じてしまう。何故ならそれは、本人の持つ異能力というものが、極自然に、肉体的にも精神的にも溶け込んでしまっているからだ。

地球上の生き物の殆んどが二つの瞳で物を見るように、日本人の殆んどが何の抵抗もなく蕎麦をズルズルと啜すすってしまいうように、本人達からすれば極々当たり前になってしまっている事象が、突然、「あたしは目で匂いを嗅げるのよ」

「蕎麦はフォークとナイフを使ってお上品に食べるものなのよ」

と言われ、眉唾ものにも近い混乱を引き起こしてしまう……ことに、どこことなく似ているのである。

それゆえに、他者が主張する異能に対しては、ことごとく敏感にならざるを得ない。

まして、

「未知の能力だつて、何らかの根拠があるはずだ……」

と、口から火の出るくらいの信念を持っている。

羽間正太郎は、頑かたくなに自らの異能について口外していない。が、しかし、偶然や奇跡などという突飛な事柄が世間で騒がれるたびに「理由のない偶然など有り得ない。……絶対に何かが絡み合っている……」

と、言葉を漏らしてしまうほど“ひょん”な偶然性を信じていない。

ほぼ病的にも感じられる疑心暗鬼な性格ではあるが、それほどの感覚を維持していなければ、愛する女性どころか自分の命でさえも守り通せていなかった。そして、その異能でさえも、使いこなせなかったであろう。

さて、その異能とやらに関してはのちのち述べて行くことにして

愛車の助手席に横たわる少女、神谷美咲を葬る事を辞した羽間正太郎ではあるが、実は本当に困り果ててしまふはこれからである。

この少女、これだけ魅力的な容貌である。ある意味、スレていないというか、熟れすぎていないというか、妙に儚げであるがゆえに、その対処に躊躇^{ちゅうちよ}してやまないのである。

「いつものように首を絞めて吐かすってわけにもいかんしな……」
相手が正太郎の標的であつたなら、その折檻^{せつかん}ぶりも容赦なかつたであろう。だが、触れる事さえ躊躇^{ためら}わずにはおれない美少女相手では、さすがの百戦錬磨とて試行錯誤するほかない。

「“害人間”の事も聞き出したいけど……、相手は女の子だ。このまま連れまわすつてのもな……」

今はもう真夜中だ。草も木も夢を見ている時刻である。なれば、彼女の親御さんとてひどく心配しているに違いない。まして“こんな”娘を持つ親であれば尚更である……と、妙に納得せざるを得ないところなのだ。

「いい気なもんだぜ、まつたく……」

正太郎の溜め息は、足元にまで及ぶ勢いだ。

と、すやすやとお姫様気取りで寝息を立てる美咲を横目に、正太郎は、ウィンカーを左に上げギアを落とし、アクセルを少し緩めた。「おっと、目の前が“東神奈川”の出口だ。俺の家も近いし、ここで降りよう。たとえ美咲ちゃんの家に下の道で送っていったとしてもそれほど遠くないしな……」

いつもの疑心暗鬼な正太郎であれば、このような判断は下さなかつた。それは、どことなく甘い希望的観測であつた。

“殺し”のあつた後で、普段なら電流がひた走るほどピリピリした感覚を持っていた。『人の生死に関わった』後の人間の心理は、果たして尋常とは思えぬほどの神経が張り巡らされるものだ。たとえ、完璧にその仕事をやり終えても、その完璧を誇るテンションであるがゆえに、鋼に高圧電流を流したような煮えたぎる熱いものが混みあがってきているのが普通である。正太郎とてそれは同じことなのである。

しかし、やはり、この神谷美咲という少女に出会つたお陰で、な

にかアンテナが狂ってしまったようだ。なにか、どこか甘い香りのするものを嗅いでしまったがゆえに、正太郎のその感覚は常人とほぼ同程度のレベルまで下っていたのである。

「ん……？」

首都高速の“東神奈川”出口のスロープを下り、ギアを落としつつゆっくりスピードを緩めると、停止線があり、赤信号が待っている。こここの出口はＴ字路になっており、第一京浜 国道十五号線と、米軍基地 ノースピア を繋ぐ幅広い道路が横たわっている。そのため、一度必ず停止しなければならないのだ。

その時である。

正太郎が停止線で信号待ちをした時、予期していなかった、いや、予期する事をし忘れたものが視界に入ってきた。

「な……、け、検問？」

声が震えた。それは世間様に後ろめたさを感じ、恐れを為したからではない。自らの愚かさ加減に、恐れ参ったからだ。

そう、正太郎の瞳に映るもの。それは正しく、警察の検問であった。ドアの横に神奈川県警と書かれた二台のパトカーが連なっている。夜の闇に異常に映える赤々とした回転灯を自動式の昇降機で高々と掲げ、「我々は市民を守る国家機関である」と大仰に誇示しているのである。

ご丁寧に二人の警官がチカチカとした誘導灯を構え、こちらの車を出迎えてくれているのが分かる。海が近く、妙にシン……とした暗がりではあるが、警官が装備している夜光ベストが白く映えるせいで人のざわめきが目に伝わってくる。車外に出ている警官は二人であるが、おそらく車内にも数人待ち構えているに違いない。時折、パトカーの車中に夜光ベストの光が反射されている。

「まいったな……」

正太郎は、ボソリと声を発した。その言葉より深刻な面立ちで奥歯を噛む。

「なんだってこんな夜に、検問なんてやっていやがるんだ……」

人というものは、考えのうまくいかぬ時ほど、口から言葉が多く出てしまうものである。彼は、自分がぼやいている事にさえ気がついていない。

しかしながら、それは分らないことではない。なぜならそれは、東京のと真ん中、銀座界隈で、あの『新世ええじゃないか』のデモ行進が行われた夜だからである。

原因不明で、恐ろしい伝染力を持つ、あの、『不鍵合症』^{ふけんごうしょう}という病が蔓延してからこのかた、国家内部にも、言うに止む無い新しい事情が出来てきた。

その中でも、警察や自衛隊という国家治安・防衛組織の人手不足は深刻さを増すばかりである。なれば、東京で起きた暴動や事件であるとして、隣県の同組織が手を貸さないではいられない状態なのだ。人口は過密さを増すばかりの昨今ではあるが、どの分野においても人材の不足化は、目に余るほどのものなのである。

なのに、これはどういうことなのか……。

「こんな所に、こんな時間に……」

羽間正太郎は、普段から自らを冷静であるべく、次の行動パターンを何百通りも用意している。

標的が反撃してきたとき――

標的が別のことを目論んでいたとき――

何らかのアクセシントで、標的を見失ってしまったとき――

そんなあらゆる状況を、将棋の棋譜^{きふ}のように何百通りも張り巡らせ、“人殺し”を行ってきたのである。そうでなければ、いくら“異能”を持った彼でも、すべてがうまく行くはずがない。

が、しかし……。

どうにも、この美少女と出会ったことで、すべてのリズムが狂い

始めている。思うようにステップを踏めないのである。それはまるで、思わぬ新米^{ルキ}に値千金の先制パンチを喰らい、よろめき、足許^{あしもと}が震えだしたベテランボクサーのようなものである。

「たまったもんじゃねえぜ、これは……」

ぼやきのスピードが増す。

そんな彼の中に、ジリジリとした焦りが胃の腑の奥底から込みあがってきた時である。

「羽間さん……」

今の今まで、沈黙が保たれていた助手席側から、小鳥のさえずりにも似た儚い美声が聞こえて来る。無論、先ほどまで正太郎がその扱いに困り果てていた美少女、美咲である。

「な、なんだ、美咲ちゃん……。気がついたのか」

正太郎は、咄嗟に苦虫を噛み潰したような表情をやめた。そしてすぐさま、まるで本のページを軽くひとめくりするかのようにな、あつと言う間に恵比寿大黒のような柔和な表情で取りつくろふ。どうあつても、何があつても、誰にも、裏の表情を見られたくはないからだ。

彼は、輪をかけたように大人びた、優しい声で問いかける。

「気分はどうだい？」

「うん、大丈夫……」

「まったく……、キミって娘^こは、とんでもないことをするんだな」

「本当にごめんなさい……」

少女の声は、蚊の鳴くよりも小さな声である。

どうやら、この少女とて数分前に起きた……いや、起こしてしまった出来事の重大さに、さすが気がついていているようである。

正太郎は、フツと鼻笑いをし、包み込むような笑顔で、

「今、高速を“東神奈川”で降りた所だ。まあ、ここからなら元町の辺りまでそうは時間が掛からない。近くのコンビニでアイスクリームでも買ってあげるよ。好きだろ？ 甘いもの」

「うん……」

「ほら、元気出せよ。美咲ちゃんを無事に家まで送り届けるからさ」
「うん……」

「ほら、ほら、キミをあの『ええじゃないか』から助け出したあとに、約束したじゃないか。横浜の自宅まで、無事に送り届けてあげるって」

「うん……」

美咲は表情がかたい。正太郎の屈託のない表情に、どうしても反比例してしまう。どうやら今の美咲には、思いのたけが言葉にならないようだ。

何かを言い出したいのだが……。

「……………」

いろいろと頭の中に駆け巡る事がありすぎて、言葉にならないのだ。

正太郎は、そんな彼女の取り付く島もなさそうな顔色を窺うと、もうそれ以上の言葉を投げ掛ける気にもならなかった。

首都高速の降り口と、一般道を繋ぐ丁字路の信号は、まだ赤色のままである。この辺りは、直接民家が建ち並んでいるわけではない。ヘドロに満ちた運河のような水路と、要塞のように立ちはだかる下水処理施設がそびえ立っているだけだ。国道十五号線に差し掛かる交差点の辺りには、殺風景なテナントビルと、なんらかの店舗の明かりの消えた街並みが見えるだけだ。

遠くの方から、霧笛の低く野太い音色が聴こえている。

沈黙の中、神奈川県警と書かれたパトロールカーの赤い点滅の光が、彼らの複雑な表情を照らし出す。

そろそろ目の前の信号機の色が変わるタイミングである。検問が目の前に立ちはだかっている。

正太郎は、美咲に話し掛けている最中でも、何を言って取り繕^{つくろ}うか、何を言って切り抜けようか、この状況をくぐり抜ける為の思案を駆け巡らせていた。

彼の、裏の事情が事情であるだけに、警察とはかわり合いに、

なりたくはない。そして、彼自身、かわり合いを少しでも持たぬように最善の努力をしてきた事実がある。歴史がある。

（それがどうだ。彼女を助けたばかりに、こうも簡単に……。この俺が警察に世話になるのは、運転免許の更新のときくらいだったんだぜ……）

心の中でばやく。ばやく……。

彼は、プロの殺し屋ではない。他人様から依頼を受け、それ相当の報酬を貰い、それで飯の種にしているわけではない。だから、警察から身を守り、司法から悠然と逃れられるようなセオリーなどは持ち合わせてはいない。だから、少しでも疑いをかけられるようなかわり合いを持ちたくはない。

確かに、創意工夫を重ね、百戦錬磨の“殺し”の経験を積んでき
てはいるが……。

言うなれば、肩書きは一般人なのである。市井しせいの民に過ぎないのである。

そんな彼が、“殺し”と“市井”を両立するには、並々ならぬ努力というものがあつた。事実、彼の頭脳と、労力と、体力は、本来の一般市民の及ぶところではない。

そんな霧の中に埋もれた鉄壁の楼閣に、微塵の穴が開かれようとしている……。

真夜中に、年端もいかぬ女子高生を連れている。誰もが羨むほどの美しい女子高生を連れ抱えている。

これが、どういう誤解を招くのか、分らない正太郎ではない。これが、どういう結果を招くのか、思考を巡らせない正太郎ではない。

（根掘り葉掘り聞かれて、御用だなんてことがあつたら……）

あまりにも間抜けな話である。

彼はまた、膝小僧にまで及ぶ溜め息を吐く。

「いい大人が、こんなおいしそうな女の子を……」

と、外野どもが、よからぬ想像を掻き立てるのに十分過ぎる材料

がそろい過ぎている。人間の欲望は、あらぬ妄想を掻き立てるものだ。

さらに――

羽間正太郎というこの男自体が、大問題なのである。

彼の愛車は、重量一トンにも満たない、ライトウエイトの小型スポーツカーである。好天の日には、天井の幌を全開にし、独特の開放感を満喫する仕掛けになっている。

そんな小型車を使用しているにも拘わらず、彼の体軀は、身長180センチメートル近くにも及ぶ。筋骨がミシミシと張り出すような威圧感。そして強靱な肉体から醸し出すオーラ。

いくら市井の民と言っても、個性に事欠かない容姿は、隠し通すことは出来ない。

さらに――

二昔前の銀幕スターを連想させるような濃い顔立ち、誰の目に見ても印象的すぎる。

まるで猛禽類の口ばしを連想させるような鼻頭に、ぽってりとした厚めの唇。いつでも湖面のように濡れている鳶色の大きな瞳。墨絵筆で力強く書き記したような一文字眉毛。

どれをとっても、彼を一度見たら忘れない。そんな彼が、裏の顔を持つという事は、並々ならぬものがある。彼の“黒い”部分の表情を見れば、相手はたちまち萎縮せざるを得ない。

だから唯一、

（普段の時だけは、笑顔は絶やさないでおう……）

そう心に決めている。そういった毎日がある。彼には、それ相当の自覚があるのだ。永遠に混じる事のない、白と黒の毒薬を胸の中に抱きつつ……。

しかし、どんなに笑顔を絶やさず、善人面を気取っていようと、この状況下は不利であることに変わりはない。

（さて、どうしたもんかね……）

この時の正太郎の複雑な心境は、地球上の誰にさえも測ることは

出来ない……。

霧笛がまた、どこかで鳴り響いている――。

と、その沈黙を打ち破るかのように、美咲が突然、

「どうして殺してくれないの……」

そう言い放った――。

正太郎は、さすがに、またふり出しに戻ったのか……と、身構えた。だが、彼女の頬からは、再び、一筋の涙が流れてきている。

（なんとも、女の子の涙は本当にやりにくいものだな……）

正太郎はそう考えながら、鼻で大きくいきを吸い込み、困惑した表情で、その場を取り繕うように答えた。

「バカ言つなよ。まだそんな事いつているのか。まったくこの分かつ屋は……。いいかい？ 俺はね、キミの思っているような殺人マシンなんかじゃないの。人殺しなんかじゃないの。キミに都合のいいヘンテコな妄想劇を押し付けるのはよしてくれるかな。まださ、そう、なんていうか……。女の子特有の恋愛妄想物語を語られる方が少しはマシってもんだぜ……。俺はね、極々一般的なサラリーマンなわけ。一般労働者であつて、給料取りなの。いいかい？ スイス銀行に特別口座なんか持ち合わせちゃいないし、特殊なライフルなんかも持ち合わせちゃいないの。ね、わかるかい？ そんな一介の不甲斐ない男に、人殺しなんてさ、出来っこないだろう？」

チラリ見る美咲の表情には、なにやら真つ直ぐなものが込み上げてきている。

美咲は、まったく正太郎の言い様など意に介さない口ぶりで言い放つ。「だって、あたし……見たもん」

彼女の声は、相変わらず蚊の鳴くように小さい。しかし、頑として、強いものが伝わってくるのである。

正太郎はこのとき、今の美咲の言葉に、果てしない衝撃を感じていた。

（や、やはり今、“見た”と言つたな……）

有り得ない。普通では有り得ない。この少女の感覚は普通ではな

い。彼女の“見た”という記憶は事実なのだろうか。果たして本当に“見た”のであるうか、と正太郎の脳裏の中に、再びあの“害人間？”という不可思議な疑問符が込み上げてくる。

「あ、あのね。み、見たって……ね。そ、そそそ、それ、キミが見たのは夢かもしれないじゃん！ ほら、こんな夜中なんだからさ。そ、そうか！ 美咲ちゃん、キミもしかして、夢遊病とかのケがあるんじゃないの！？」

「ないもん。そんなの……」

彼女は、両手に抱えていた缶コーヒーをつかみ直し、くるくると回す。

「だったらさ、きっとそれは幻でも見たんだよ。極限状態だったんだよ、あの時……。人はね、窮地に追い込まれると、ありもしない幻覚を見てしまう事があるんだ。良くある事なんだよ。な、恥ずかしいがる事なんかないさ。だって、それが人間なんだもの」

正太郎は、どこかで聞いた風な言い回しを、もつともらしく言い放った。普段からのこんな言い回しをするのが、彼の常套句でもある。

しかし、

「うそだもん。そんなのうそだもん……」

美咲は一向に受け入れようとはしない。

目の前を横切る誰が渡るわけでもない横断歩道の信号が、チカチカと点滅し始めている。正太郎は、そろそろこんな会話を終わりにして、検問に備えなければならない。

だがしかし……、

「羽間さんは、知らないだけ……。羽間さんはいい人過ぎるの……」

美咲が、わけの解からないことを言い放つ。

正太郎は、彼女のまるで話の脈絡のなさに、つい、声を荒らげてしまった。「な、なにをこの俺が知らないって言うんだい！ なにがいい人過ぎるって言うんだい！ 大人をからかうのはよしてくれるかい？ キミの話には、いくら俺だってついて行けなくなるよ！」

正太郎は、いきなりの激しい口調で言い放ってしまったことに一瞬後悔をした。しかし、当の美咲は、まるで深遠の森の中にある湖の水面のように、静けさを保ったままだった。

そして、静かな、優しい高音のヴァイオリンの音色のような口調で、

「分かっているよ……、分かっているのよ……。羽間さんは、決して悪い人なんかじゃないし、ひとを“殺してなんか”もいない。ただね、ただ、苦しんでいるだけなの……」

そういつて、もうひと粒、光るものをこぼした。「もう、苦しまないで……」

「な、なにを言ってるんだい。なにが言いたいんだい。わけが分からないよ！ 美咲ちゃん！ キミはいつたい、この俺になにをして欲しいんだい！？ なにが目的なんだい！？」

正太郎は、さすがに微笑みを押し通すことが出来なくなっていた。だが、美咲は、それが当然とばかりの様子で、シートとシートベルトに挟まれるようにしてあずけていた体を反転させ、また、正太郎に寄りすがりながら彼の左腕をつかんで来る。

「おねがい、羽間さん聞いて！ 私ね、私ね……」

彼女の表情からは、なにやら意を決したような迫力がみなぎっている。もう、なにか、揺るぎない何かを伝えようと、必死なものが込み上げてきているのが分かる。

しかし、このとき……、目の前の信号が、ちょうど青になった。

正太郎はこの瞬間、美咲の話を聞こうとはしなかった。いや、聞こうとしなかったのではないのかもしれない。

ただ、

（目の前にある、いやなものから片付けてしまいたかっただけ……）
なのだ。

だから彼は、即座に左足に力を入れ、クラッチを踏み込み、シフトレバーをローに入れ、アクセルを軽めに踏み込んだ。もちろん正

太郎の視界には、美咲が必死に話しかけてきている姿が見えている。涙ながらに、強い意思で何かを伝えようとしている姿が見えている。しかしながら、当然のごとく、正太郎には美咲のその一言が伝わっていない。

なぜなら、彼の愛車の——ほどよくチューニングされた四気筒エンジンの——エキゾーストの重低音が、美咲の声を掻き消してしまっていたからである。

（この難関を切り抜けてから、ゆっくりと聞いてあげるよ。それまでは……。アイスクリームでも舐めながら、ゆっくりとね……）

正太郎は、彼女の言葉を、さも受け取ったかのような振りをしつつ、ニツコリと微笑んで見せた。しかし……

彼が、そんなことを考えている間にも、美咲がなにやら言葉を放っているのが受けて取れる。口をパクパクと大きく開け、腕をつかみ、力強く話しかけてくる。その行為が、どれほどまでに重みがあるのか……

このときの正太郎には、まるで理解できなかった。

そう、彼の頭の中では、今の美咲の必死の言葉より、

（この検問を、いかに、どうやって、平穩無事にくぐりぬけようか……）

のほうが、最優先課題なのである。

そう、“市井”での立場を守るために。愛する女性との幸せな空間を守るために——。

だが、のちにその判断は、

（最大のミスだった……）

と、痛感することとなる。そう、その優先順位の位置づけこそが、羽間正太郎のこれからの生き様を変えてゆく、最大の岐路であったと言っても過言ではない。

彼の“殺し”の手際と、“市井”の狭間には、今まで培じいかわれてきた経験に裏打ちされた“読み”というものが存在した。ここぞと言う時に、その感性は発揮された。

だが、その“読み”という、はかり知れない能力が、彼女と出会った事により、弱くなっていたのは事実である。果たして、この作用は何を意味するのだろうか。何を示唆するものなのだろうか。

無論、のちに正太郎は、この時のことを心底後悔することとなる。後悔というものは、決して、したくてするものではない。が、人間にとつて、これだけは避けて通ることはできない試練なのかも知れない。

まさに試練。いくらあらゆる“棋譜”を用意している正太郎とて、この時の美咲の言葉が、それほどまでに重大な意味を成してくるなどとは、夢にも思えなかった……。

Ｔ字路の交差点を発進した彼の愛車は、目の前に立ちはだかる神奈川県警と書かれた、二台のパトロールカーの並びへと、吸い込まれるように誘導されてゆく。赤い、チカチカとした参列は、彼にとつて極度の緊張を呼んでいる。

これが、裏の事情を持つ者の性であるのか。これが殺人者たる負い目なのだろうか。

（“あの瞬間”よりも、胃の辺りがグツグツと言っていていやがる……）
正太郎の座りかけた大きな瞳に、赤黒く燃えるような血流がドクドクとみなぎってくる。

正太郎は、思わず舌なめずりをした。

そして彼の、指の先。舌の先。つま先から頭髮の先端。そしてあらゆる肉体の先端部分にまで、これとない黒々とした血流が巡り及んだ時、

(すべてを消してしまえば楽になる……)

彼の意識の半分が、そう語っている。

そしてもう半分の意識が、

(闇雲に絶つことはならぬ……)

激しく抵抗する。

彼の中の、永遠に混じる事のない毒薬は、相変わらず熱く冷え切った葛藤を繰り広げる。そして闘い続ける。そしてまた、右手の人差し指が鼻の横を搔く。

(俺は人間だ。俺は人間なのだ……)

言い聞かしながら、鼻から大きく息を吸い込み、また口から吐くそれを三度繰り返す。あわよくば壊れかけた心を取り戻しながら正太郎は、二人の警察官の誘導に促されるまま、車を路肩付近に横付けし、止めようと右足をブレーキの上に置こうとした。その時である――

「だめ！ 羽間さん、今、車を止めちゃダメ！」

美咲が大声で正太郎の左腕を揺すった。それはもう、彼のデニム地で縫製された深緑色のジャケットの袖が破れんばかりの勢いであった。

「あ、ああ……！！」

まさに袖を強引なほどまでに引っ張られてしまった正太郎は、またもや不覚にもハンドルを急激に切ってしまった。案の定、高速道路を走行していた時ほどの勢いではないものの、ブレーキを踏みそこなった彼の愛車はあらぬ方向へとUの字を描きながら、路肩近く

に停めてあつたパトロールカーへの並びへと突進してゆく――。

鈍い音がした。鈍い衝撃が彼らの体じゅうに及んだ。そして、正太郎の心の中に凄まじい動揺が走った。

（なんなんだ。なにが起きたんだ。どういふことなんだ！）

緩いスピードで体当たりをかました彼の愛車は、二台が連なつているパトロールカーの後車の後部座席のドア部分に軽く突き刺さるような格好で止まっていた。それほどの接触事故ではない。いわゆる大事故とは言いがたい。しかし、これは正太郎にとって大事件であることには間違ひはない。

「あ……ああ……」

声にならない。

なんなのだ。この仕打ちはなんなのだ――

言いたくても声にならない。

世の中には、二種類の間があるという。運の良い者と、そして悪い者。果たして正太郎は、そのどちらかであるかなどと考えあぐねて自らを悲観するような“タマ”ではない。だがしかし、

（これはちよつと、ありえないだろう……）

ばやいてしまうのも仕方がない。

だが、そんな程度でこの場面が終わるはずもない。なぜなら……彼が、ぶつかってしまった愛車を軽くバックさせ、助手席に乗せたとんでもないお姫様に対して煮えくり返るものを抑えつつ、なにが言い訳を考えようとした瞬間、

「あ……ああ？」

思わず、目の前に繰り広げられた光景に声をあげてしまったのである。

正太郎の愛車がぶつかつたパトロールカーの後部座席のドアは、ぶつかつた衝撃でドアのロックが外れ、ぐらりとした勢いで開いてしまった。すると後部座席のシートから、なにやら大きな物が二つ、どさり……と、落ちてきたのである。

マリオネット……？

彼の頭の中に第一に思い浮かんだ言葉がそれだった。

なにせ、こんな夜中には人通りなど皆無に等しい場所なのだ。街灯の明かりでさえ薄っすら照らされているだけだ。彼らの目に映しこんでくる情報など、たかが知れている。しかし……

（ば、ばかな……、そんなはずは……）

正太郎はぶりと、全身に身の毛がよだつものを感じた。眼前に見ゆるもの。それは、濃紺の上下を身に纏い、お馴染みのマークが印してある制帽が転げ落ち、腰には拳銃と警棒と、そして重厚なベルトが巻かれている。大人の体だ。二人の警察官の体だ。

だが、なにか普通と様子が違う。なにやら様子が違う。

（事故を起こした余韻からではない）

彼は咄嗟にそう感じた。

そのだらりとした風体ふうていの二体の体躯は、泥酔し、まるで繁華街の道端にだれかれ気にすることなく転がっている若者のように力なく突っ伏している。いや、別の言葉で言うのなら、それはまるで糸の切れた、もう用済みの、ゴミくず同然の操り人形のごとく身を守る事を知らない動作で曲がりくねっている。

赤々とした回転灯がコマ送りのスクリーンのように二体を照らし出している。

正太郎の喉が、ゴクリと地響きのような音を鳴らした。手の震えが止まらない。まるで休火山のマグマが地底の奥底から眠り目覚めてくるような負の衝動を感じる。

違和感……

そうだ。違和感だ……。

暗がりの中、二体の警察官の様相に止め処ない違和感を覚える。

人間の体を構成するのは、その中心部にある胴と四肢……。腕、足、胴体。しかし……

（なにか足りない……）

本能的に感じた。正太郎は、眼前に広がる光景を、紛うかたなき

凄惨で無残な屍である、と感じとっていた。無論、彼の幾度となく何度となく人間の死というものを体感してきた蓄積が、そう感じさせているのだ。

しかし……

（なんだって、こんなところに……）

いくら羽間正太郎が、百戦錬磨の殺人者とはいえ、虚を衝かれれば啞然とする。なにしろ彼は、警察の検問であると信じきっていたのだから。警察の検問以外の何物でもない疑いをかけていなかったのだから。

そしてもう一つ。彼が虚を衝かれた理由に、もつとも重要な部分がある。それは……

二体の屍には、人間の体を構成する一つめの部分がない……と、覺つたからだ。もつとも重要な部分……頭部が見当たらなかったからだ。

（なんなんだ！ どういうことなんだ、これは……！）

当然の如く、辺りは血の海に染まっている。パトロールカーの後部座席から、ドアから、そして二体の体躯が崩れ落ちたアスファルトの面から、赤黒く、そして鮮やかな液体がその場面を埋め尽くしている。煌々とした赤色の光がそれを照らし映すたび、その光景の悲惨さを、より凄惨に映し出している。目の前の屍の首の部分をマジマジと見ゆると、肉と骨を切り裂いたあとのぬめりとした部分から、未だドクドクとした体液が噴き出し続けている。なにゆえ、ここまで残忍さに至らしめるものぞ。

このとき、正太郎はふと我に返った。

「美咲ちゃん！ 見るな！ 見てはダメだ！」

あらゆる死の光景を見てきた正太郎でさえ、血も凍るような凄惨な光景だった。なれば、こんな場面を無垢な女子高生に見せるわけなどいかぬ。

正太郎は、自らの左腕にしがみつき悲痛な叫びで何かを訴えかけてきていた少女を強く守らねばいけぬ……と光速の勢いで悟った。

だから、音速以上の勢いで美咲の体をゆすり上げ、美咲の意識を目の前の悲惨な光景から逸^そらそうとした。

しかし……。

「美咲ちゃん！ 美咲ちゃん……！」

少女の体を強く揺すったが、うんともすんとも反応がない。この少女も、まるで出会った頃感じていた美少女人形のように、木偶^{でく}と化している。

と、その時——、彼は、その少女の肩を揺さぶった時に、なにやら自らの手に、妙な違和感を覚えた。ぬるぬるとした違和感。これぞとない違和感……。

正太郎は、おのれの全身からざっと血の引いてゆくを感じた。そして、これまでに味わった事のない焦りを感じた。

（血だ、これは……まぎれもない、これは血だ……）

彼の手のひらに伝わってくるもの。それは目の前にいる少女の……彼が自宅まで送り届けることを約束した少女の、紛れもない赤々とした生温かい血液の流れだった。

その血液は、未だ容赦なく流れ出し続けている。どくどくと、どくどくと……。それはまるで、子供のころ浜辺の波打ち際で砂遊びをした時に感じた、砂城の崩壊によく似ていた。

一度崩れ始めたら止まらない。もう二度ともとに戻る事のできない崩壊の始まり。決壊。夏の海での砂の城の思い出。

ようやく形になり出した砂の城は、いたずらに寄せてはかえす波の強弱によって容赦ない攻撃を受け、そして土台から手につかむことの出来ぬ土砂と成り変り、息をのむ間もなく崩壊し始める。白い砂。白いキラキラとした砂。泡交じりの運命にも似た汚れた海水に翻弄される珠玉のような白き毒薬——。

その儚い記憶がたった今、彼の両の手に抱かれた少女の体と連鎖反応を起こしている。この成熟を待ちきれない少女の体を通して連

鎖反応を引き起こしている。

正太郎の逞しい体に、もたれかかるようにして崩れる美咲。その儂く美しき容姿の土台には、海水にその形成を泥のように溶かされてゆく赤々とした血液の流れが受けて取れる。

（なぜなんだ、どういうことなんだ——！？）

彼の記憶と、黒いイメージとが交差しあう。怒り。悲しみ。憎しみ。驕り——。

幼いときから得ていた殺人者としての血の色は、よもや我の自制心によって支えられていた。しかし……

永遠に混ぜ合わさる事のない毒薬は、彼の衝動を限りなく黒の方へと導いてゆく——

見れば、うつむいてのたれかかる美咲の背中に、ギンギンと不気味に光り煌めく刀剣のようなものが突き立てられている。長い、細長い、刃こぼれなど微塵も感じさせぬような真剣が、一縷の迷いもなく突き立てられている。その刀剣は、天井の合成シートの幌を見事實通し、美咲の背中まで及んでいる。

美咲はピクリとも動かない。ただ、ただ、彼女のやわらかな匂いと体温を感じさせながら、今までそこにあった正太郎の記憶に、あの清純にして無垢な赤子の小動物のように汚れなき香りを、これぞとない柔和な感情を、叩きつけてくる。

害人間は死なない——

美咲はそう言っていた。果たしてそうなのだろうか？ 本当のことなのだろうか？

羽間さんは何も知らない、何も知らない。いい人過ぎるの——

彼女は最前からそう言っていた。汚れなき心を前面に押し出して一筋の、珠玉の涙を落として、何かを訴えかけるように、さもなだめかけるように言い続けていた。俺はその心にきちんと応えていたのだろうか？ 誠心誠意応えてあげようとしていたのだろうか？ いや、それよりも……この状況は？ この血の惨劇の意味は——

？ 美咲ちゃんが刺されなければならぬ理由は——？

彼の“棋譜”は、よもや一瞬にして蜘蛛の巣のごとく張り巡らされた。冷静。沈着。そして――

憎悪……。

ことごとく抑えられていた自制心が崩壊し始めた時である。八年前に起きた事件。その時に匹敵するような憎悪の類いが、彼の肉体を席卷し始めた時である。

殺す――

彼の脳裏に、それ以外の単語が見当たらない。それは正太郎に對を成すものに対しての地獄を意味する始まりでもあった。

美咲に突き立てられた刀剣が、瞬く間に抜かれ、彼女の背中から弾けるような血しぶきが飛ぶ。そしてまた刀剣の怒り狂った攻撃の雨霰のように振り込もうとした、そのとき――

正太郎は瞬時にギアをバックに入れ、急激にクラッチをつなげ、アクセルを思い切り踏み込んだ。

凄まじい後輪の回転が獣の雄叫びにも似た高音を轟かす。同時に彼の車は残像を空气中に映し描きながらスピンし、一回転する。

正太郎は少女を強く抱きかかえたまま、ドアロックを外し、そのまま肩で体当たりしながら愛車のドアを突き破った。スピンしたままの車から投げ出される格好で二人の体が路面へと叩きつけられる。彼の愛車は、地響きと、狂気の雄叫びを上げたまま、瞬く間の勢いで路肩部分に停めてあったパトロールカーの二台の並びへと突っ込んでいった。

正太郎は、肩甲骨の筋肉のやや厚めの部分から着地した。アスファルトの路面とデニムの擦れる荒削りな音が、バリバリと彼の右耳の辺りをつんざいた。スピンした車からいきなりダイブした勢いで、この世の物と思えぬほどの衝撃を感じたが、顎を引き、首から上を守るような姿勢で転がり果せたお陰で、^{おお}氣を失うほどの痛みは全身には走らなかった。だが、少し前に、悠里から贈られたばかりの深緑色のテーラードのジャケットの、背中の部分に大きな穴が開いて

しまったことが、少なからず心痛む。

いや、彼の痛みはそれだけではない。

胸の内に抱きかかえ、ピクリともその動作を再開せぬ少女の温もりが、彼の胸を打つのだ。この少女の血の混ざった涙の一滴が、彼の胸を焦がすのだ。この少女の……、この守らなくてはならぬ少女の悲痛な叫び——いや、純真な痛みを理解してあげられなかったことが、本当の意味での彼自身の痛みそのものなのだ。

美咲は、この動転の最中でも、眉一つ動かす事はなかった。彼女の小さな体を包み込み、あらゆる衝撃からさえも守ろうとする正太郎の腕は、傷だらけ、擦り傷にまみれ、赤く、黒々とした液体にまみれていた。血に染まっていた。

しかし、それがなんなのだ。その程度の痛みがなんなのだ。彼女の痛みはそれをも遥かに凌駕するほどの痛みなのだ——と、胸の中を締め付ける。胸の内を焼き尽くす。

守る事が遅かったのか。守る事に、それほど愚鈍だったのか——
正太郎は今知った。彼女の悲痛な叫びが何であるのかを。何であつたのかを……。

（理由なんてどうだっていい。この俺の……いや、彼女の異能の意味なんてどうだっていい……。 “害人間”の意味を知ろうが知るまいが、俺の立場がどうなってしまうおうが——手を突き出して助けを求めてくる者を守ってやれなかったことが愚かな行動だったんだ。それなのに……。これで何度目なんだ、羽間正太郎。これで何人目なんだ、羽間正太郎……。人の気持ちを無下にして、誰が何を守ってやれる、誰が何を救ってやれるっていうんだ。目の前にいる者の気持ちを邪険にしまったのは俺の罪……。俺は、その罪を背負ってここまで生きてきたつもりだ。だからこれだけのことをやってきたつもりだ。だが、俺は……。俺は……。）

正太郎は、この窮地の最中でも、自省という数千本の刃の責め苦に苛まれていた。^{さいな}それは彼の生い立ち、そして、生まれ持った異能の重圧そのものに由縁を發していた。

3：殺戮のうたげ（一）

3

正太郎の腕に抱えられたその少女にまだ微かな息がある。すべすべとした白くキメ細やかな肌からもわずかな精気が感じとれる。言葉ひとつとて、溜め息ひとつとて、この少女から発せられるものにはありはしない。だが、生きる未来への脈動が、鼓動が、美咲の弱き小さな体躯から伝わり続けている。

（しかし、このままでは……）

いずれ、確実に、時に促されるまま、運命に翻弄されるがまま死を迎える……。

彼は、ちぎれるほどに痛む腕を、肩を、腰を、そして体全体を、心を、猛然と奮い立たせ、土煙と砂埃の匂いのする冷たいアスファルトを這うようにして転がっていった。そして、いかにも美咲の体を守りながら、あらゆる衝撃からかばいながら、自らの感覚を正常に戻してゆき“標的”の好きなようにさせまいと次の攻撃と行動を予測し、適度な間隔をあけるのであった。

（美咲ちゃん……。俺は、君を死なせはしない。死なせやしない……）

何度も何度もつぶやいた。彼は、赤黒く、土ぼこりにまみれた血だらけのジャケットの袖で自らの顔を拭いながら、これにまでない標的——美咲を刺した者のいる方向に目を凝らし、熱く滾りきった黒い眼差しでにらみつける。

（標的は、多分一人……。いや、二人。確実に殺らねば、その時は……）

…)

このときの正太郎の精神状態——、それははっきりと二分されていた。白と黒。救済と破壊。新鮮で真っ白な生糸を紡ぎあうような建設的な心と、失敗作の陶芸品の行く末を暗示するかのようものの見事に砕け散った破滅の精神。人の心の奥底を撫でくすぐる、しやぶり尽すまでの慈愛に満ちた優しさと、相手の心を、過去を、精神を、そのすべてを微塵に砕き尽くすまでの飽くなき憎悪——そんな、過去からの忌まわしき因縁を繋ぎとつたまま、見えない敵と対峙した。

「何が目的なのかは知らんが、キサマらの思うようにはさせん！」

正太郎は叫んだ。喉から絞るような大声で叫んだ。その声は、十二月のゴツゴツとしたコンクリートの冷え切った箱庭に反響し、二度、三度となく木霊した。

見えざる敵——。

非道なまでの残虐さなら、今までの敵とは変わりはない。だが、こうも直接的で、こうも“無意味”な敵は、ありはしなかった。

（悠里だけならいざ知らず、別の少女まで手にかけようとは……許さん！！）

正太郎は、美咲の体を固く冷え切ったアスファルトの上に、そつと寝かせた。それはまるで、襟元で二つ手に束ねられた柔らかな長い髪に、血の跡が残らぬように。傷つかぬように。まだ首の据わらぬ赤子を扱うような手ほどきであった。

そして、全身に鞭打ちながらその場に立ち上がる。さあこい。さあこい。この俺は、ただのうのと生きてきた男ではないぞ、ただ呆然と日々を見送り生きてきた男ではないぞ、とばかりに、辺りに目を凝らし、耳を澄まし、あらゆる感覚を研ぎ澄ませた。

実は、先ほど彼が大声を発したことに、大いなる意味があった。それは、この標的の感覚との“間^ま”を測り、敵の位置を予測するためのものであったのだ。

彼は常時、意味の成さない事を極力行わない。それが、他人の目

から“どう見ても無意味”と受け取られようものであっても、“どうあっても無駄だ”と罵られるようなものであっても、彼にとつてはひとつひとつが次なる行動への布石であるものなのだ。

無論、彼は武芸者、ならびに、達人と称されるような武人ではない。兎角、先達の師に鍛え上げられた剛の者でもない。しかし、今の今まで生きて来て、生きて、生きて、生き抜いて来るために備えた執念が、そして憎しみを与えた者への怨念さえもが、彼をそのような常人と逸脱した者に育て上げさせたものなのだ。

この高速道路高架下のスペースに、人の物の音なるものは一切しなかった。ただ、先ほどから少しばかり霧が濃くなつて来ており、真冬の海からなる濃密な潮の香りが辺りに漂い始めてきている。風は凪いでいる。時折、国道の方からタイヤの擦れる音が響いてくる。しかし、それだけだ。

視界は闇に近い。なぜなら、夜半過ぎの照明は昨今の電力不足のため、半数以上の街路灯が消されているからだ。

濃密な霧が漂ってくるたび、反響さえもが湿気に消されている。

にじり……という、自らの足音さえもがぼやけるように聞こえて来る。

（どこから……）

正太郎は、足をハの字に開き、腰をどつと据えた。腕を自然にだらりとおろし、柔らかく顎を引いた。肩、腕、肘、そして背中から来る打ち身や擦り傷の痛みが酷かったが、その痛みも“のんまり”とした呼吸と同時に、なにやら緩やかなものに変わっていった。

（ヤツらは、武器を持っていた。それも長い……。凶悪な武器だ）
そう思った時、彼は、ふ、と鼻笑いした。自らが相手を“凶悪”と称したのがいいえて妙だった。

以前、剣を持ち、無造作に暴れまわってくる者と対峙した事がある。だがそれは、こちら側から標的の暗殺を企てた時、たまたま気づかれ、反撃されたものだ。このようなケースは初めてだ。だが……一瞬、ざわり……としたものが彼の右頬を圧迫した。その刹那、

正太郎の目が、瞬く間にかつと見開られる。

（人の考えなど、所詮単純なもの……）

正太郎は、何を思ったか急激に両膝を折り仰向けに寝転ぶような体勢になる。すると、その体勢の上を、冷たい奇声を纏った鋼の駆ける音が通り過ぎた。

びゅつ。

一矢、何も恐れぬ、何の疑いもなく放たれた一撃である。いわば、殺人を目的とした一撃である。

その狂気なる一撃は、ものの見事に正太郎の首筋を狙った。つまり、急所攻撃をしてきたわけだ。正太郎は、それを感じ取り、予測し、かわしたのだ。

なるほど、今時には珍しい無垢なる女子高生“美咲”を刺したのも、この“太刀筋”に間違いはない、と彼は感じ取った。一瞬ではあるが、この太刀筋を避ける際に、太刀先から生温かなる血の匂いがした。

（だが……）

首をはねられ、不遇な殉職を余儀なくされた警察官二人。あれとは違う……。そう判断も出来た。なぜなら、この一撃に使われた刀剣が、長身細身の洋剣であると見切っていたからだ。

（やはり間違いはない。標的は二人以上いる……）

正太郎が、確信を得た瞬間だった。なにせ、長身細身の洋剣では刀身が細すぎて人間の首を切断するまでには至らない。折れてしまう可能性が高いのだ。殺人を目的とした“手錬れ”となれば、そのようなリスクを背負ってまで首を刎ねるとは到底思えない。

となれば、この攻撃をしてきた者の犯行ではない。もっと斬撃に突出した“持ち物”を手にした者が他にいるはずだ、と考えたのだ。そして驚くべき事に、その彼の判断に要された時間は、ものの一秒にも満たなかった。

その刹那――

正太郎は、寝ころばった体勢のまま両腕をくの字に折り曲げ、両

掌を耳元に這わせながらふんばり、その反動を活かして右足を天高く蹴り出した。

がつん……という音が鳴った。その音とともに、聞いた事もない女のうめき声が、霧むせぶ高速道路高架下のスペースに木霊した。
「アウツ……！！」

正太郎の渾身の一撃が、迫り来る凶者の洋剣を持つ手にヒットした。洋剣は瞬く間に天上へと跳ね上がり、一時の間をもって、土埃と霧むせぶアスファルトの路面へと落下した。乾いた硬質の金属音が辺り一帯に反響する。と同時に、正太郎を襲った殺人も厭わぬ影はバランスを崩し、前のめりにつんのめった格好で転がった。

（尽かさず反撃が来る！ 右、左、右、そして下からだ……！）

正太郎を襲う凶者の影は、無駄のない前転を一度二度繰り返すと彼に有無を言わさぬタイミングで再び飛び跳ね、閃光のごとき速さで向かってくる。瞬時、向こう脛の辺りから、きらりと鈍く光る短剣のような物を抜き出した。

「キイツ……！」

喉の奥から絞り出す“雉”の雄叫びにも似た奇声が発せられる。その影は正太郎の予測どおりの動きをしながら『右、左、右、そして下』の順に“それ”を振り回した。鋭く尖った凶刃の刃先は、わずか数ミリの感覚で彼の鼻先を横切り、不気味な轟音を伴って暗闇の中を疾駆した。

チツ。

耳元に響く甲高い音と共に、正太郎のジャケットの袖ボタンが宙を舞った。脂汗と共に細やかな戦慄が走る。彼は、相対する者の瞬間的な心理を把握し、光速に勝るとも劣らぬほどの速さで算段高く攻撃をかわす。が、肉体も鍛え上げられた“手練れ”相手に、“素人”の正太郎ではいささか荷が重い。

「くっ……」

苦しまぎれの肉声が漏れる。とはいえ、正太郎には、この狂気の攻撃から逃れる術が一つしか残されていない。

（ヤツより一步でも早く、思考を巡らせることだ）

右、右、左、上から……そして突き！

容赦ない凶刃の攻撃は、一向に止まぬ。その攻撃に対し、彼の思考は目くるめく残影とともに熾烈なる防御を継続し続ける。

今の今まで正太郎に対し、苛烈なる殺人戦を挑んできた者に、明日の朝日を拝められる機会は皆無に等しかった。それは彼の“異能”の賜物であり、今現在、彼が行っている異常な“読み”の成果でもあった。それは、寸分の差で勝機を見出し、そして雌雄を決する盤上の駒のような戦い方であり、智慧と経験による“寸分の智略戦”とも言える決闘そのものでもあったのだ。そしてそれは、闘いを挑んできた者の姿が、“まな板の上の鯉”を意味していた。

だがしかし……。

（このままでは、俺に分が悪い……）

今に至っては、そう思えるのだ。そう感じざるを得ないのだ。

なぜ、このような“戦闘慣れ”した者が襲いかかってくるのか。

なぜ、こうまでして狂気とも言える輩に、^{やから}だまし討ちを喰らわさなければならぬのか。——戦いながらだが、また“ぼやき”を口ずさむ。

その時である——

「アリアドネ」ガお怒りナノダ……！！」

豪快に刃を振り回しながら、凶者が言葉を放った。

「なにっ……！！」

正太郎は虚を衝かれ、つい反応してしまう。

するとまた、

「アリアドネ」ガお怒りにナッテイルノダ！」

凶者が、息をつかせぬほどのタイミングで攻撃を仕掛けながら言葉を放った。しかるに、どこか、たどたどしい発音である。だが、日本語を放っていることは理解できる。

紙一重でかわしながらであるがゆえに、あまりにも唐突な相手の言動は、正太郎を益々動揺させた。

（な、なんだ。なにを言っているんだ、こいつは……！）
熱く、冷たい汗のしたたりが、路上のところどころに跳ね飛んで
いる……。

先ほどから暗闇で目を凝らし続けているせいか、大分目が慣れて
きた。攻撃してくる相手の様相も、おぼろげながら形を帯びてきて
いる。

見覚えのある、誰にでも馴染みのある制帽。そして、形式ばった
ベルトのついた制服。足元にはブーツを履いている。しかるに、警
察官の様相であることに、間違いはない。

なるほど、あの時、検問に誘い入れた警察官二人は、この凶者の
“片割れ”であつたに相違ない、と正太郎は思った。今は、自分を
目眩ませるために夜光反射材をはずしているが、そうであるに違
い。

しかし、

（こいつは、一体……！？）

相対し始めた時から、何となく気づいていた。そう。まさしくこ
の凶刃の相手は、“女”であつた。声の質や、体躯の“なり”から
でもそれが受けて取れる。俊敏、豪快、正確無比な攻撃をしてくる
割には、どこか力任せではなく、滑らかなばねの様な動きが特徴的
だった。流麗で曲線的な肢体からも、それを察する事ができる。“
女”は、警察官に成りすまし、正太郎をまんまとおびき寄せたとい
うことだ。

とはいえ、今はそんなことが問題ではない。

この“女”は、突然言い放つたのだ。たどたどしい日本語で。し
かも振り絞るような大声で、“アリアドネ”がお怒りになっている
のだ——と。

これは、果たしてどういうことなのか。どういう意味であるのか
さえ、さすがの正太郎でも、まるで意を解するに至らない。

それどころか、相手は“異国人”である可能性が高い。

“異国人”。

つまり、今までの標的とは違う可能性が高くなっているというわけだ。

そう。今まで、彼と対峙してきた非道なる者達は、必ず日本人であった。それが偶なるものか、必然であるものなのかは、正太郎に解かりかねるところではあるが、こうも直接的で残忍非道な“やり口”を鑑みても、新たな相手である事がうかがい知れる。

（こいつは、俺を殺しにきた……？　これも、美咲ちゃんの言っていたことと関係があるのか？）

またしても、彼の脳裏にこびり付く“害人間”というキーワードが暴れ始めた。

（そんなことより……早くこいつを葬って、美咲ちゃんを病院にまで連れてゆかねば！！）

自らの寸分先の生死さえ、解することの出来ぬ正太郎ではあったが、おびただしい使命——美咲を自宅にまで送り届けねば——という本能が、彼を不屈の思考へと誘い^{いざな}続けている。と、同時に——悠里を一人おいて、死ぬわけにはゆかぬ——その思いだけで生き延びてきた感がある。

（死の淵に、這いつくばつても生き延びてやる！！）

正太郎は、凶刃の攻撃を寸分の差でかわしながらも、精神を集中し、相手の首筋へと狙いを定めた。

（この俺に闘いを挑んできたのが、そもその間違いなのだ……）

正太郎が、相手の首筋に触れた時——。その勝負が決まる。雌雄を決する時である。つまり——、標的の“死”が、確定することを意味する。

正太郎の異能力——

それはまさしく、殺人機械——。破壊と粉碎に優れた能力。

彼が“その気”になり、指を相手に触れさえすれば、相手の思考そのものをことごとく破壊できる。

具体的に、かつ、抽象的にいえば、それは白と黒を表と裏に対照

的に張り合わせた“駒”を挟み撃ちにして“陣”を奪いあつてゆく
“リバーシゲーム”の動向そのものであり、対極的にみてもその内
容がよく似ていた。

人の思考をいうものは、大きく分けて『生まれ育った環境によつて形成してゆくもの』と、『生まれついて備わっているもの』とがある。

『生まれ育った環境によつて形成してゆくもの』というのは、言葉やその土地土地の慣習などによるものであり、積み重ね、あらゆる経験や教育によつて蓄積されてきた“概念”と言つても過言ではない。そしてそれは、人それぞれの環境にあわせ、成長を促す材料といつてもよいだろう。

と同時に、それは、

「郷に入つては郷に従え」

の言葉通り、臨機応変にその形態を変えてゆく事ができる。まあ、しかし、それは人の能力によつて異なるものだが……。

話は逸れたが、それは洗脳や、宗教、教育などでも変わつてゆくものである。

だが……。

彼の能力は、しかるに凄まじいものだ。なぜなら、

『生まれついて備わつたもの』

を、指一本触れるだけで転換してしまう能力であるからだ。

言葉がいささかややこしいので、わかり難いかもしれないが、つまり彼は、相手の首筋に触れる事で、対象者の思考に容易に入り込み、本能をともいうべき『生まれついて備わつたもの』を、まったく逆の意味に反転させてしまう事ができるのだ。

“リバーシゲーム”をご存知ならわかるだろう。この盤上は、8×8の升目に区切られており、その駒と駒を同じ色で挟む事で、自らの駒の色に変えてゆく事ができる。

しかし、ひとつだけ別の条件をもつた所がある。それは、

『四隅の角』

の存在である。

このゲームの特徴は、“直線上”に相手の駒を挟む事によって、自らの駒の色に変えてゆく事ができる。が、しかし、『四隅の角』に置かれた駒だけは、そうは行かない。ルール上、直角に相手の駒を挟んでも、なんら意味を成さないからである。

『四隅の角』――。

つまりそれは、人間の思考にとって『生まれついて備わったもの』を意味するところであり、その生物が生きてゆく上でなくてはならない“必須条件”のようなものである。一言でいうのなら、それは“本能”。そして、生体機能そのもののことである。

正太郎は、それをいとも容易に“反転”させることが出来てしまうのである。有り得ない能力。禁忌の能力と言ってもよい――。

それは、この世に生きる人間にとって、凄まじき能力であり、“過ぎた”能力と位置づけても反論はないであろう。

常人であるならば、能力の意味に圧力され、発狂してしまうこと間違いのない、分不相応な“力”であるものなのだ。

彼は、この“異能”があることにより、ことごとく悩み続けてきた。子供のころに至っては、自分が何者であるのか疑ってきたぐら이다。

だが――

（生き抜くために、ことごとく利用させてもらう――）

これが今現在の、彼の信条である。そして生活の一部となっている。

“凶女”は、未だ日本語とも外国語とも判断のつかぬ言葉を発しながら、刃を振りかざしてきている。正太郎には、何語で話しているのか判断がつかねたが、言葉言葉の合間にたびたび放たれる“アリアドネ”という発音だけが、はっきりと耳を通して聞き取る事ができた。

確かに、その言葉の意味が解からないまま、この“女”を闇に葬るのは解^げせないが、それも美咲を守るため、そして自らが生き残る

ためには仕方がないこと、だと思った。

勝機は見えてきている。なぜなら、かの“凶女”の攻撃のパターンが、回を重ねるたびに読めてきたからである。

（臨機応変というより、この女……、まるで機械マシンのようだ……）

人の心と言うものは、ある一定のリズムを刻むと心地よく感じられる。それは各々によって速さ、強さ、激しさなど好みが変わるところだ。が、しかし、正太郎には、今現在相対している“凶女”のリズムが、まるで冷え冷えとした工作機械の奏でる退屈な音にしか聞こえなかった。

（生い立ちこそ分らないが、悲しい女だ……）

正太郎は、やはり、この“凶女”が、今まで相対してきた者どこか違うということを感じた。美咲に“目撃された”までの標的なら、どこか、なにか、腹に一物めいたものを感じざるを得なかった。人間の業ごうというものがそこにあった。だが、この女……

（人の匂いがしない……）

人ではないのか、とさえ感じた。しかし……

いや、それはない。なぜなら、一瞬でも痛みの声を上げ、焦りの雄叫びを上げたのだから——ふたたび結論付けた。

（悲しいかな、それも人の業……。俺に出会ったことが、この女の災厄——）

正太郎の汗は引いていた。息も乱れていない。寸分の心理。相手の心の奥底。そして、その生き様までをも掌握し、彼は標的な人物の生涯に終止符を打つ——。

（これで終わりだ——！！）

“凶女”の右手に持たれた凶刃が、正太郎の左胸のところをかすめた時、彼の間髪入れずのひざ蹴りが入った。凶女は、不気味な大声を上げて、わき腹を押さえ転げまわった。あばら骨の二、三本が内臓に食い込むような一撃なのだ。よほどの“凶女”とて、これはかなりきいたようで、二の次の攻撃の来る様子もなく、ピタリと動きが止まり、どっと倒れ込んだ。

正太郎は、すかさず“凶女”の体を背後から捕らえ込む。

（あ……！）

あまりの勢いで“凶女”の被っている制帽がはらりと前に弾け飛んだ。すると、制帽に携えられていた“凶女”の長い髪が水鳥の羽のように左右にはだけ散り、霧むせぶ宙に広がった。

（こ、黄金色……！！）

そう。それはまさしく、黄金の翼を思わせるほどの見事な毛髪の舞いであつた。この暗闇の中に光る異国の舞いの姿。時の流れをひたもと感じさせぬ永遠の舞。

その麗々しい金翼の間を縫つて、白く滑らかな首筋が現れる。

正太郎は、少しの間、その光景に見とれながらも、左腕で“凶女”を羽交い絞めになると、右手を天高くかざし、人差し指と中指をそろえて強く突き出し、彼女の首筋目掛けてそれを放とうとした。

その時――

（羽間さん、だめっ……！！）

悲痛な叫びが、正太郎の頭の中を駆け巡った。彼は、その言葉にギョツとし、ぴたりと動きを止めた。

（な、なんだ……なんなんだ、今の声は……）

確かに声が聞こえたのである。しかも女の声である。少女特有の声帯の震えの効いた、甲高い声――である。はつきりとした日本語の発音であつた。

もしや、この女の声色ではないか……、と正太郎は自らが羽交い絞めにした女の喉の辺りを探った。鍛えられてはいるが、男に比べ、細く、長く、滑らかな首すじ。その首筋は、正太郎との激しい戦闘により、なまめかしくもじつとりとした汗で濡れていた。

しかし、それが僅かながらでも、振るえ出した形跡がないことは明確である。

（となると……）

正太郎は、数メートル先に視線を配り、目を凝らした。暗闇の中ではあるが、そこには、制服のまま仰向けに寝かされている、傷つ

いた儚き美少女の姿がある。

美咲が動き出した形跡は見られない。なのに……

何かが、また、正太郎の思考を狂わせていた。このような、異様ともいえる焦りを感じるのは今宵が初めてであった。新しい衝撃。混沌。そして、葛藤に誘い行くその理由——。この夜に起きている事実は、まさに異状であった。

そして、この現実には、まさに、あの少女と出会ったことによるものではないか、と正太郎は感じていた。自らが画策した事が、ことごとくおかしい方向に進んでゆく——。

あの少女を助け出してしまったことは間違いではなかったか、と思わざるを得ない。だが、それだけは認めたくはなかった。

しかし、

（この一抹の不安は、なんだ……）

そればかりが付き纏う。

そしてまさに、その動揺をみせた瞬間に、彼の悪い予感が狙い定めたように襲い掛かってくるのである。

「ぐっ……！！」

背後から、虚空をも切り裂く響きが通り過ぎた。殺意を持った一撃が打ち下ろされてきたのだ。その斬撃は、紙一重で正太郎の肩の辺りをかすめ、地上のすべてを真っ二つにしてみうのではないかというほどに、アスファルトの路面に食い込んだのである。

「フヒヒヒ……」

異様な笑い声が、暗闇に響いた。男の声であった。濃密な霧の中に、油の焼け焦げる異臭が漂った。どうやら、幅の広い、斬撃に突出した刀剣を使用しているようである。

（油断した……）

正太郎は、自らの焦りを恥じた。標的は、彼の一瞬の隙を狙っていたのだ。

（もう一人いる、と分かっているが——）

擦り傷まみれの背中がぱっくりと割れ、どくどくと血が滲み出し

てゆく。正太郎は、顔をしかめると、うな垂れ気味に苦しがつている“凶女”から即座に離れるしかなかった。

襲い掛かってきた男。無論、“凶女”の“片割れ”である事は間違いない。そればかりか、

（この男は――）

あの、首を刎ねられた警察官の無残な屍を思い浮かべると、悲痛な思いが込みあがってくる。

用意周到とでもいうべき殺人鬼。仲間である“凶女”をはなから“かませ犬”に使っていたのは明確であった。

(なんという卑劣な……！)

正太郎は、有無を言わず迫り来る斬撃を避けようと、思いのまま身を転がし、“片割れ”との間を計った。が、しかし……

「ぬおっ……！」

彼が立ち上がるうとした瞬間、こめかみの辺りに一陣の風が吹きぬけた。

すぱり——。

なびいた髪が一気に舞い散った。“片割れ”の攻撃が、正太郎の予測より断然速かったのだ。

(なんという奴……)

恐ろしい敵である。正太郎の超人的とも言える動体視力がなければ、頭部と胴体がサヨナラを言わねばならぬところであった。寸分の差で“ヤツ”の太刀筋を見切ったが、切れ味鋭い輝きは、正太郎に並々ならぬ恐怖を植え付ける。

その太刀筋は、大上段から振られると思いきや急に反転し、斜め下から切り返してくる——と思いきや、体ごとくると急回転しながら袈裟懸けに切りつけてくるのである。さすがの正太郎も、丸腰のままこれを避けるのは非常に厳しかった。思考が敵対する者の先々を行っても、肉体がついてゆかないのである。なにより、精神的重圧——恐怖と言うものが、彼の思考を鈍らせてしまうのである。

(これが俺の限界なのか……)

年齢を重ねてくるたび、思考のキレは増してくる。だが、肉体の衰えは否めない。彼が常々感じていたことである。時に体の節々がきしみ、筋肉の要所が悲鳴を上げている。ギリリと光った刀剣の筋が正太郎の目の前をかすめてゆくたび、えもいわれぬ焦燥が駆け抜けてゆく。

片割れの男はかなりの使い手であった。この動き。この間。この

タイミング——。奴のすべてが殺人といえた。

肉体のすべてを存分に活かし、剣に力を与える。時にはくるりと一回転しつつ攻撃してみたり、時には力任せに思い切った突きをましてくたり。

あまりの変幻自在の攻撃に、正太郎の思考でさえもついてゆくのがやっとであった。

（奴の首筋に、触れられさえすれば……）

形勢は逆転するのだが、触れるどころかよける事さえまならぬ……。

（うつ、このままでは……）

切っ先が、正太郎の肉を貫くのは時間の問題である。

まずは鋭い刃先に皮膚を裂かれ、勢いで肉がえぐられる。血管は繭玉を裂いたように寸断され、体中に圧力をかけられた血液が湯水のごとく噴出する。やがて意識は遠のく。白目をむいた目玉が飛び出す。一切の筋力が低下すれば、涎が津波のように飛散し、糞尿は垂れ流すことをやめないだろう。その時点で自らの屍は一瞬にして“人”から“物”に変化する。まるで生きている間に体験すること是一切なかった陵辱の嵐が全ての外観を“負”に席卷してゆくのだ。それが“死”なのか——。

正太郎は、自らの死に際を予測した。実にむごたらしく、実に情けない無様な死に際だった。

俺はこのまま死んでしまうのか。このまま奴に殺されてしまうのか。誰ひとりとも別れの言葉を交わすこともなく、誰に言い分けを述べる事もなく。殺られる理由もしらぬまま……。ただ、なにも知らぬまま死んでゆくのか、と。

無念——

その一言が彼の脳裏を過ぎった。無常な一言であった。

彼は、今の今まで、存分に生きてきた道程の証しが欲しいわけではなかった。表の生活と共に、裏の世界に纏わる由縁を誰に認めて欲しいわけではなかった。

ただ——、真実を知りたかった。そして唯一、心の中に住む者を
守りたかった。それだけなのだ。

（悠里……）

正太郎は、その女性の顔を思い浮かべた。その瞬間、彼女との思
い出が彼の頭の中を走馬灯のように駆け巡る。二人が出会ってから
八年が経過する。その間、様々な出来事があった。

呪われた少女にまつわる由縁。呪われた一家にまつわる惨劇。呪
われた血の粛清。

何とも形容のし難い陰惨な光景が、彼の見てきた、味わってきた
……そして関わってきたそのすべてが羽間正太郎とこのひと時も気
が置けない存在となった彼女とを結ぶ絆と言っても過言ではなかつ
たからだ。

だからこそはつきりと言えるのだ。

（このまま俺が死んでしまえば、彼女はもつと不幸になる——）
と。

ひなみゆづり
日次悠里という一女性に与えられた境遇。これこそ現代におけ
る最も過酷でもっともミステリアスな悲劇だと言う事は、何を隠そ
う、それに気づいてしまった世界でたった一人、羽間正太郎という
存在に他ならなかったからだ。

そう考えれば、今、彼が死ぬることなど以ての外。

（俺が今死ねば、悠里はたったひとりで……）

羽間正太郎に死は許されぬのだ。それがどのような理由であつて
も、それがどのような難関であつても、彼にはやるべきことがある
のだ。これは、幼きころより課せられた運命なのだ。

（やられてなるものか——！！）

この時、羽間正太郎の脳内に無数の超爆発が起きていた。それは
恐ろしいほどの連鎖をみせ、絨毯爆撃によって舞い上がる業火のよ
うに膨れ上がってゆくのであった。血流は異常なほどの流れを見せ
ていた。血糖値はあれよという間に急激に上昇していった。左右を
繋ぐ脳梁はすべての脳細胞とのコンタクトを開始し、あらゆる脳内

物質は一瞬にして大量放出の手をやめなかった。そして、先々に起こるであろう膨大な量の未来予測イメージを噴出させ、確実に、かつ、正確なベクトルを指し示してゆくのであった。

正太郎の動きが変わった。片割れの男の太刀筋が四方八方から蝶が舞うように飛んでくるが、まったくその動きに抑圧されることはない。右水平に一閃——凄まじい風きり音が来ると思いきや、一突きにスズメバチの針のような攻撃が仕掛けられてくる。が、しかし、正太郎はいとも容易くその攻撃をよけてみせる。右、左、右、そして大きくステップ——。その動きはまるで、ラテンの遺伝子に感化された情熱の舞いを見ているかのようである。

無論この時、“片割れ”の表情が、不敵な笑みから焦りに変わっていったのは口にするほどでも無いこと。幅広の両刃の剣を思いつく限り、縦横無尽に振って見せるが“獲物”に当たる気さえしない。それどころか、一振り刃を切って見せるたびに、虚しささえもが込み上げてくる始末——。

「キイイ——!!」

と、片割れが声を張り上げて見せるも、その勢いで大剣が虚空を切り裂くばかりで体力だけが消耗してゆく。

正太郎は、この相対する男の表情が一寸でも曇るのを待っていた。まさにこの時であった。断崖絶壁に棲む野性鹿のごときステップを踏む羽間正太郎の右足が、急に弧を描いたように上空に振り上げられたのである。

がつん——。

耳の穴をつんざくような音を立てて空中に飛んだのは、あの“凶女”が使用していた洋剣である。少女美咲を刺した洋剣は、持ち主に帰らぬまま冷たいアスファルトの路面に佇んでいたのだ。正太郎は、それが自らの後方に転がっているのを察知し、タイミングを計り、奴の攻撃を避けながら移動していたのだ。そして上空に、天高く蹴り飛ばしたのである——

「あつ……!!」

と、片割れが吃驚の声を上げるのと同時に、洋剣は回転しながら天上より落ちてきた。

片割れの男は、すかさずその洋剣を払いのけた。回転が凄まじいだけに、自らの持つ大剣を大振りにしてかわすのが精一杯である。そしてその一瞬がこの男の唯一の命取りとも言つべき一手となつた。正太郎は、まさにこの“隙”を狙っていたのだ。彼は、片割れが洋剣に気持ちが入っているのを見るや否や、独楽ユラのように体をくると反転させながら奴のふところに飛び込むと、

（ふっ……！）

と、鼻ですかし笑いをし、閃光のごとき速さであつと言う間に奴の背後を捕らえてしまう。すかさず、大蛇のように左腕を片割れの首に巻きつけると、右手の人差し指と中指の二本の指をツンと伸ばし、狙い定めたかのような目で、

（たまには、死んでみるのもいいだろう？）

と、悪鬼の笑みを浮かべ、きやつキヤツの“思考”の奥深くに潜入したのである。

「う……」

片割れの男は、その暑苦しい顔を一瞬にして硬直させた。かと思つと、続けざま全身までも硬直させた。その動向を見届けた羽間正太郎は、捕らえていた腕を緩め、片割れの男のそばから勢いよく離れた。

「キサマには、一番むごたらしい死に際を用意した。観念しな……」はき捨てるように笑みを浮かべる彼の表情は、まるで人ではないような……。

片割れの男は、その言葉を聞き終えるまで微動だにせず、ただ、直立したままじつと動こうとはしない。警察官の制服の格好のまま、両刃の大剣を右の手にもったまま、呆けた顔で突っ立っている。すると突然――、

「ごわっ、ごわっ……」

と、声にならない“声”を上げだして痙攣し始めたのである。

片割れは、目の玉をひん剥いて震えだした。右手で掴んでいた大剣が力なく路上に落ちると、ぐわんぐわんというけたたましい金属音が辺り一帯に鳴り響いた。その瞬間、きやつ両膝は力なく折れ曲がり、まったく無防備のまま冷たく硬いアスファルトにつんのめり、激しい音をたてる。

「ごわっ、ごわっ……」

相変わらず“ウシガエル”が鳴くような不気味な悲鳴を上げる片割れの男。片割れの表情からは、一切の余裕と言うものが消えている。それどころか、藁にでもすがりつくような凄まじい恐怖というものが具現されている。眉間にうるこのようなしわが寄り、脂汗が噴き出している。目の玉は今にも飛び出してきてしまうような勢いがあり、血色と思しき“生”を感じさせるものは一切見られない。今にも喉の奥から腕がにょきにょきと伸び出してきてしまいそうだった。

正太郎は、片割れのその姿に、氷のような、それでいて憐憫に満ちた眼差しをくれた。そして言葉を発するでもなく唇をもごもごと動かし、汚れた言葉を吐き捨てるのであった。

今まさに彼の行った思考への潜入こそがこの世の地獄、そのものだった。人間の中にある……いや、人間の中に必ず存在する“生”に対するベクトルの一つを奪い去ってしまったのだ。呼吸という“生”に欠かすことの出来ない大事なものを。片割れの思考、そして全ての機能から“呼吸”という一連の動作そのものが消し去られた。つまり、片割れの男はもう人間として生きられぬ欠陥商品になり果てたのだ。

片割れの男が正太郎の足元を這いつくばりながら掴みかけようとする。しかし正太郎は何も言葉を発しようともせず、ただ黙ってそれを見ているだけ。

それでもなんとかすがり付こうとする片割れの形相がこの暗闇の中でも手に取るように窺えてくると、彼は片割れの悶え苦しむ横顔

をあたかも汚物を扱うかのように靴先で蹴りあげた。

片割れの男は、声にならない声を上げたまま、後ろ向けに倒れこむ。きやつ表情からは、“呼吸”という機能を奪われた事への恐怖が滲み出している。普段から必ずあるものだと思われて止まないものが、一瞬にして無に変換される。人間にとつてこれほどの恐怖は存在しない。まして、“生”へのベクトルを剥ぎ取られてしまったのだ。何はなくとも呼吸をしなくては人間は生きてゆけない。

血液は流れていた。肺も存在していた。横隔膜もあれば、胃も腹筋もある。なのに呼吸の仕方が分からない。いや、呼吸という機能そのものの全てを消去されてしまったのだから、あつても意味を成さない。

今や、片割れの男の思考を駆け巡るのはパニックという名の恐怖のみ。

こうなれば、人は何も考えることはできない。ただ、僅かながらの“生”への執着心がみつともない行動へと駆り立てるのである。きやつのは体は、まるで沼の奥底から間違つて飛び出してきたしまった鯉のように、くの字への字に勢いよく折り曲げてアスファルトの路上を飛び跳ね回る。口を大きくぱくぱく動かしながら、いつそのことひと思いに殺してくれ、殺してくれ、とでも言っているかのように。

路上に、片割れの男が引つ掻いた幾筋もの血の跡がにじむ。涙の跡がにじむ。飛散するよだれの跡がにじむ。そして、何かにすがりつくような、情けないうめき声が木霊する。

だが、それも束の間。憤りと悲痛の哀歌が終止符を迎えた時、片割れの男は事切れて動かなくなった。

微かだが、遠く海の彼方から、また霧笛のむせび泣く音色が聴こえて来る。

正太郎は、少しばかりしゃがれた声で言った。「キサマだって、こういう死に際は生まれてこのかた予想していなかったのだろう？」
片割れの死顔を覗くと、それは明らかに無念の表情で埋め尽くさ

れている。

さらに彼は耳を澄ましたが、もう人の気配はしない。殺気が感じ取れない。ゆえに、あの“女”は逃げたのだ、と確信が持てた。

（ひとまずは助かった……。このままやり合っていれば、おそらく俺は……）

静まり返った気配を背に、正太郎は胸をなでおろす。

ようやく霧が晴れてきたが、真冬にしては生暖かい風が柔らかに吹き込んできた。路面から、埃の匂いがツンと立ち込めてくる。突然、雨が降り出してきたらしい。上気した彼の頬に、わらわらと冷たい雨粒が当たっては流れてゆく。それはやがて激しさを増し、辺り一帯の路面を黒々と濡らし始める。

彼は真っ黒に染まった上空を見上げ首を振った。そして路上に横たわる少女を抱き上げて、しばらく目をつぶったまま動かなかった。

4：いのちの代償（一）

4

二日前の晩に起きた『新世ええじゃないか』の狂気な騒動による被害は、人々が考えるより遙かに甚大な悪影響を及ぼしていた。過去数年間、日本の各主要都市でさまざまな形態を為して行われてきた『ええじゃないか』騒動とは、まさに規模も様相も桁外れに違っていたからだ。

そのデモ騒動に直接関与したとされる者の数約二万人。そのうち自殺したと思われる死体の数、百六十五体。なんらかの不足の事態に巻き込まれ死亡したと思われる者二十六名。重軽傷合わせて各地病院に搬送された者が千五百名余りにも及ぶ。

うち、器物破損の罪で検挙された者や、猥褻行為等で検挙された者。仲間内での暴力行為や、警察官などへの公務執行妨害で緊急現行犯逮捕される者も後を絶たなかった。すべては、街中に設置された監視カメラが状況を把握していた。実際には無許可で起こされた騒動であるから、テロルの類いであることは間違いなかった。

ある意味滑稽でありながら、いわずもがな陰惨な現場に成り下がってしまった銀座の街は、あのお洒落で情緒めいた街並みを一晩にして地獄絵図に変化させてしまった、と伝えられている。あまりにも品のないデモ騒動であつたがゆえに、「機能を完全復旧するのに一ヶ月以上は掛かる様子」と何らかの諮問機関が公共放送のニュースを通じ、代表が悲痛の念を露わにしながらその弁を語っていた。事実、街中に全裸、半裸に近い遺体などがごろごろと散乱していたのだから、警察の現場検証などで時間を食ってしまったのもやむを得ないのかもしれない。

そんな悲痛な叫びが飛び交う中、妙に元気があり威勢がよかったのがマスメディア各陣の報道である。特に主立ってお祭り騒ぎのように囃し立てたのは民放のテレビ局である。暮れも押し迫った中で起きたこのような大事件は、彼らの恰好の素材だったらしい。

ある局では、デモ行進の中で亡くなつた自殺者の身元をいち早く探し出し、家族とのコンタクトを開始するや、

『地上の不治の病——不鍵合症の真実の末路』

と銘打って、亡き者の一生を痛切に語るようなドキュメンタリー番組を放送した。

無論、その番組に対し賛否はあつたものの、当ドキュメンタリー番組は国民の関心の的となつた。

それを受けてか、それとも必然であつたのかは“神のみぞ知る”といったところだが、その後テレビのチャンネルを変えれば似たような番組がひしめき合うこととなるのである。

その国民感情の動向は、羽間正太郎にとってうつつつけのものとなつた。なぜなら、おとついの晩の出来事が、妙な具合に隠れ蓑に覆われていったからだ。

正太郎は会社仕事の外回りの途中、横浜駅の駅ビルの中階にある喫茶店“マリー”に立ち寄つた。入り口付近まで来ると、必然的にコーヒ―豆を焙煎する香りが彼の脳髓を刺激してたまらなくなる。ゆえに、おのずと足が向いてしまうのだ、そうだ。

そのたびに、

「快楽を求めることが、人が生きる一番の理由なのかもな」

などと、勝手な理屈を宙に向かって口走る。言いて妙。店の入り口をくぐる辺り、彼はいつも含み笑いをしてしまう。妙な慣習になつている。

とにかく“マリー”の店内は狭い。カウンター席が五つと、四人が腰掛けられるテーブル席が二台があるというだけだ。ここに来る誰もが、小学校の片隅に追いやられたウサギ小屋のような圧迫感を

覚える。一世代前のテナントフロアの宿命というやつである。

木目調のインテリアを主体とした店内は全体的にコーヒー色に染められている。まるで、昭和の空間に置いてきぼりを食らった雰囲気である。ガタが来ている木造りの椅子はキシキシと音が鳴り、正太郎の立派な体軀では少々窮屈そうだ。腰掛けるにも少しコツがいる。腰骨を浮かすようにそつと落とし入れないと、反面立ち上がったとき、腰から下が抜けなくなってしまうのだ。だが彼はそのスリルがいいらしい。

「いらつしゃいませえ」

若くて可愛らしいウェイトレスの挨拶で出迎えられる。店内は、夕方であるにも拘わらず、客が人っ子一人いない。微かに昔懐かしい時代を連想させる歌謡曲が流れている。

彼女の甲高い声を背に、彼は西口のロータリーが一望できる窓際のカウンター席へと向かう。そしていつものように、腰を浮かし気味にのつそりと椅子に座る。

正太郎は、真冬の外気にさらされて冷たくなったガラス窓に目をやり、おぼろげな顔つきで外の様子をうかがった。不鍵合症がもたらした不幸な時代であっても、この街はまだ死んだ様子ではなかった。人々の苦悶に喘ぐ表情も、そして精気溢れる歡喜に満ちた表情でさえも直視することは出来ない。が、しかし、なんとなくではあるが何かを感じ取ることが出来た。

「……………」

その時、正太郎は街に向かって一言、なにかつぶやかずにはいられなかった。

もう街全体が仄かに赤らみ始めていた。ロータリーに連なるテールランプが楕円を描いている。彼にはそれがなにかいけ好かない“虫”の行列に思えてならなかった。

彼は店内に視線を戻すと自由に読み合いの出来るマガジンラックに手を伸ばした。そして、その日届いたばかりの夕刊を引っこ抜いた。さらさらと紙を広げ舐めるように紙面を見渡すと、三面の片隅

から小さくその記事が飛び込んで来た。

『高速高架下、パトカー謎の炎上 警察官“三人”の焼死体発見』
。

彼が、あの晩の事件報道を初めて目にした瞬間である。

（一応、世間の目はごまかせたということか……）

軽く吐息を漏らし、彼はそつと心の奥底で胸を撫で下ろした。“片割れ”もろともパトカーに火をつけたのは誤算ではなかっただろうかと、心もとなく思っていたからだ。しかし、あの状況の中で証拠隠滅をするには最良であった事は間違いではない、と確信に近いものを持っていくはなかった。なにしろ時間も余裕もなかったのだから……。正太郎は、草色を基調とした格子柄のネクタイの結び目に手を掛け、二度三度となく左右に首を揺すった。

「ご注文はお決まりですか？」

小柄なウェイトレスがカウンター奥から唐突に声をかけて来る。

正太郎はギクリとして新聞から目を逸らしたが、なにこともなかったかの様子で応えた。

「ブレンドを濃い目で」

「ブレンドですね」

ウェイトレスは、猫が目一杯背伸びをするように体全体をカウンター奥から乗り出し、四角い氷が二、三浮いたお冷のグラスを差し出して来た。正太郎は頷きながら、

「ああ、濃い目のやつね。僕はいつも濃い目なんだ」

と、にこやかに返した。

「はあい、かしこまりましたあ。ちょっとだけお待ちくださあい。マスター、ブレンドダークワンでえす！」

彼女のせまい店内一杯に響き渡る声。彼女はまだティーンエイジーヤーらしい、と彼は思った。元気ハツラツとして、なにか、どこか怖いもの知らずな素振りが印象的なのだ。思わず彼は気がゆるみ、ふふ、と鼻笑いをした。

この店には横浜駅に立ち寄った際にちよくちよく顔をだしている。

しかし彼自身、彼女を見た記憶がない。どうやらこのウェイトレスは新顔のようだ、と判断した。

この娘は高校生のアルバイトだろうか、ピンク色の無地のエプロンの下はどこかの学校の制服らしい。いかにも陸上系かソフトボール系の運動部に所属しているのではないか、と思わせるザンギリ頭のおかつぱヘア。小玉すいかのように小さな顔が、真冬の今でも日焼けしている。シャム猫のようにどこか気品のある瞳が可愛らしい。いかにも痩せ型といった感じで華奢に見えるが、シャキシャキのレタスのように瑞々しく、健康的で途轍もない活きの良さを感じさせる。お冷を差し出した腕が針金のように細い。しかし、さすがに成長期の娘だけあって、新鮮なトマトの実の表面を見ているようだ。どこかあどけない語尾遣いが、複雑な心境の彼の心を和ませてくれさえする。

彼女は、小さな伝票に慣れない手つきで走り書きすると、ニツコリと愛想笑いをしながらカウンターの奥へと消えていった。その時、そうだ美咲も高校生なのだ、と彼は思った。すると、昨夜から張り付いて離れない胸の痛みが彼を襲ってきた。

（彼女をなんとか病院に送り届ける事はできたが、その後の容態を知ることが出来ない……）

正太郎は、あの晩に出会った少女、美咲の容態が気になって仕方がなかったのだ。

確かにあの晩、彼は彼女を死の底から救うのに懸命になっていた。そして結果、二人を地獄の底へと至らしめた。それは夢物語でも妄想の産物でもない。紛うかたなき現実の出来事なのである。至らしめたのは“美咲に目撃された時の男”と、“片割れの男”だった。

（片割れの男か……、いつたいヤツは何者だったんだ）

あの検問に待ち伏せていた二セ警官と首無し死体。どう首を捻ろうとも分らない。腑に落ちないことだらけである。

（美咲ちゃんが刺された理由……、この俺に仕掛けてくる理由。どちらから考えたとしても、やつらが結びつく接点が見受けられない。彼女が言っていた“害人間”というものが本当にあるとするならば、それも要因なのだろうけど……。俺までが襲われなくてはならない理由がまるで分らない。まるで分らないんだ。それに……）

それに、今まで誰にも知られず隠し通してきた彼の能力。そんなものを、さも最初から知っていた少女の存在自体が謎のまま。それゆえに正太郎の心境が宙に浮いたままになってしまふ。異能の存在をほとんど正確に把握されていた状態なのだ。しかも成り行きとはいえ、殺されかけたとはいえ、人を一人、見るも無惨な死へと追いやったのだ。己の所業に震えが止まらぬのも無理もないことである。

俺は自分の立場を守るために人を殺したのか？ 自分の満足を得るために力を利用したのだろうか？ 彼はこんな事が起きるたびに気が狂いそうになり掛けるほど何度も何度も自問するのだ。己の肉体が滅び、いずれ鬼籍に名を連ねることは必然である。その時、いかにもいかめしい面構えをした地獄の閻魔大王が目の前に立ちただかるのだ。このどでかい、もうもうとした髭面で真っ赤に気色だった強面の巨人は、俺の顔を上から覗き込み、なんと声をかけてくるのだろうか、どんな顔をして裁決を下すのだろうか。その表

情は怒りに充ち満ちているのだろうか、それとも上からものを見る者特有の皮肉たっぷり目線で罪状を述べてくるのだろうか、そんなふうだ。その光景を思い浮かべながら自らの理性と本能を闘わせねば、己がとうの昔に独裁者の成れの果てになってしまっていた、ということとは想像するに容易いからなのだ。

彼は、こんなちっぽけな自分にほとほと呆れてしまっている。が、どんなにちっぽけな自分を理解したところで、己の力の強大さは計り知れない。むしろ、互いの関係が反比例運動を起こしていると思える。

だが、それでも彼は問い続けなければならないのである。これが公衆の面前だと分かっているが。これが悪い癖だと分かっているが。

（あれから、やつらの炎の色が目には焼きついて離れないんだ……）

彼の脳裏には、奴らの屍を地獄の業火で焼き払った光景がはつきりと浮かび上がってきている。おとつい晩のパトカーもろとも吹き飛ばした閃光が、何度も何度も繰り返されてしまうのである。だから仕方ないのかもしれない。彼の病はとことん闇に向かっていくのかもしれない。そのたびに彼は過去の自分に咆えるのだ。

いったい。いったい俺は、どこへ向かって行けばいいんだ——と。

あの晩——

片割れの屍は糞尿の臭いにまみれていた。

何かこの世に置き忘れていった情念が悪臭となって具現しているように思えた。正太郎は、片割れの腕をずるずると引っ張ってパトカーの中に放り込もうとする。すると、やつの制服のどこからか何か落っこちた。なるほど最近流行りの小型超電子ライターというやつだ。手のひらにすっぽりと収まるサイズでジュラルミン製の高価なやつ。真ん中辺りには何やら丸い文様のようなものが浮き彫りになっている。レア物らしい。案外こいつ……ミ―ハーなんだな、と

鼻で笑ってやる。

そんなミーちゃんハーちゃんな刺客をパトカーに無造作に押し入れると、運転席側に廻り込み、ボンネットの開閉レバーを引いた。そしてエンジンを覗き込み、形状を確かめる。後方のトランクからの車載用具のボールを探し出し、もう一度エンジンに廻り、ピストン部分に狙いをつけてそれを思い切り振り下ろした。

がつつ――。

青白い火花が散る。そうか、さすがにオールセラミックス製のエンジンだな、と彼は感心する。

それはまるでビクともしない強固な意志そのものだった。天上から振り下ろした彼の一撃では壁を叩き割ることはできなかった。

まったく……アンタツチャブルとでもいうやつ――

彼は、一度溜め息をつきボールを膝に立て掛けると、右手の人差し指で鼻の横を掻いた。その時、少年の頃に映画館で観たエリオット・ネスの揺るぎない何かを思い出す。

アメリカ禁酒法の時代。ネスは“正義”の為に仲間を選びずぐり、不撓不屈の意志で“悪”の力ボネを法の裁きへと追いやった。あらゆる脅しや誘惑にも負けず、信頼しきっていた仲間の死をも乗り越えて。

ふん。比べるまでもない――

最初はあまりに硬くて歯が立たなかったが、安価な素材と手抜き工程で造られたセラミックス製のエンジンはいとも細かい亀裂を伴いながら、ゴツゴツと派手な音をたてずに崩れていった。いける！と彼は思った。そして、混合気が噴出するピストン部分の辺りを入念に叩き割った。

ある程度の亀裂を確かめた後、水素燃料分解システムの安全弁口ツクを外し全開にさせた。システムのコントロールパネルには、一気にオーバーロードを示す赤ランプが点灯する。

血の赤だ。真っ赤だ。

血液と体液の匂いが充満している車内。そこに気化燃料の混合気

が相まって一気に腐敗臭のようなものが加速する。

雨粒が激しくなってきた。そのまま放っておきたかったが、片割れに殺られた二人の警察官の遺体が後部座席から崩れながら突っ伏している。やれやれ。彼は深く溜め息をつき、二人の遺体を抱き上げる。両腕が血液と何かでべったりになる。

彼は、一瞬だけ念のこもった黙祷を捧げ、丁寧に後部シートに座らせる。首はない。暗がりでは分からなかったが、彼らの無念そうな表情が二つ、じっとこちら側を見ているような気がする。彼は何気ない調子でつぶやく。おいおい、そんな悲しい目でこっちを見るなよ。感謝ぐらいしてくれよ。

最後に、自らの愛車に乗り込み、二台のパトロールカーから移動する。三十メートルは離れただろうか。“片割れ”の自慢のライターの着火ボタンを押し、それを遠くから適確に投げ入れた。閃光が走る。爆風と爆炎が辺り一帯を轟かせる。あつと言う間にパトカーは粉々に碎け散り、後に残ったものが可燃物と一緒に燃え出した。

あいつら全てを燃やし尽くせただろうか――

彼は炎を見つめ、そう思った。何をしに、何を求めて俺たちは“殺りあつた”のか――。

その炎の色は、これまでの出来事すべてを無に帰す勢いがある。いったいこの炎は何色なんだ。彼はそう思った。なにが、なにを、なんのために燃えているのか。まったく予測のつかない色だった。ただ彼はそれをジッと見つめ、頬に当たる熱の感触を確かめていた。

それがおとついの深夜の出来事だ。あれから何度も思い返した。

そして彼は、何度も心の奥に言い聞かせていた。それは、自らが殺りたがってやったものではない。あちら側から仕掛けてきたものだ。だがこれだけは言わせてくれ。あれは成り行きなのだ。そうだ、そうなんだ。あれは己の身を守るためのものであり、少女美咲の命を守るためのものだったのだ。殺したくて殺したんじゃない。奴が気に入らなくて殺したんじゃない。あれは殺るしかなかったんだ。

あの時はああするしかなかったんだ。殺るしかなかったんだ、殺らねば殺られていたんだ、と。

夕闇の中、窓ガラスに薄っすらと自らの姿が映し出されている。羽間正太郎はその奥でいっしょうけんめい蠢蠢いている“虫”の行列相手に、強く言い訳をした。

彼の意識は常にこの世界に存在している。誰よりも強くそれを誇示している。あの晩の出来事もそうなのかもしれない。それははっきりとは分らない。だが、見えているのだ。常に感じるのだ。何もかもが。ありとあらゆる何もかもが。

目の前に通り過ぎる百代の人々の心が。全ての物質の鼓動が。さまざまな人間模様でさえもが――

だからあれほどの攻撃でさえ予測できる。これは彼による彼の中の厳然たる事実。

大袈裟なのかもしれないが、それが彼の真実だ。あの夜の異様な攻防劇のように、知り得るはずのない一瞬の動きが、まるでコマを送ったストロボヴィジョンのように見えている。

いつものことだ。さして気に病むことはない。俺はその核心を辿り、常に何百通りも脳内で演習し、実践する。それだけだ。彼はそう思っていた。

だが、あの日は勝手が違っていたんだ！ 何かいつもと勝手が違っていたんだ！

彼は、『新世ええじゃないか』の騒ぎに自らが飛び込んでいった時の事を思い返す。

（俺がやりたいのは、人殺しじゃない！ やりたかったわけじゃない！）

しかし、その様な言い訳が世間でまかり通るわけがない。理解されるはずもない。そんなこと、子供の時分から解かっていたじゃないか。解かり果てていたことじゃないか。やはり人殺しは人殺しなのだよ。そう。夕日が沈むあの日、あの時、あの瞬間にそう結論付けたじゃないか。答えを出したじゃないか。正太郎は渴いた唇をぎ

ゆつと引き締め、喉の奥で声にならない声で叫んだ。

すべては完璧に隠し通さねばならない。誰にも知られてはならない。それが今までの定石であり、己の生活を守る必然である。しかし……

どう相手から仕掛けられたにせよ、この虚しさだけは拭えない。

普段の彼のやり口であれば、彼が疑われるような要因など残すはずがない。あのような派手な立ち回りなどするわけがない。

（なのに、まったく俺ってやつは……）

俺ってやつは――。

タイヤ痕は残す。血痕は残す。靴跡は残す。あまつさえジャケットの破れた切れ端などはあの辺りに散乱しているはずだ。目撃者がいなかったただけ幸運といわねばなるまい。

幸運の要因は他にもあった。あの後、激しい風雨が冬の関東地方を襲ったのだ。これはかなりの証拠隠滅の手助けになったのは言うまでもない。

それだけに、彼女は助かったのだ、と正太郎は願いまじりに考えていた。

だが、彼女に会いに行くことはままならなかった。そう。確認が出来ない。生死の行方さえ分からない。なぜならあの晩、近隣の救急病院に美咲を届けてゆくことが至難の業であったからだ。

(俺の姿が人目に触れれば、それだけ疑われる確率が高くなる……)
これは、裏の顔を持つものであれば誰でも思うこと。偽装の脚本を組むものなら、できるだけリスクを伴う行動は避けるべきだ。事件の表舞台に顔を出さぬべきだ。

正太郎はいつもそうしてきた。それが彼の生き様だった。裏の顔と市井の顔の隔絶。それこそが彼の唯一残された生きる道。そして生き残るすべてだった。

(やはりそうだ、そうだとも。ただ感情に流されてしまつては本末転倒というもの。横道に逸れた魚のままでは、生まれ故郷に辿り着かない……)

彼は考えあぐねた結果、直接自らが美咲を病院に送り届けるという手法より、公衆電話から救急隊を呼ぶという手法を最善とした。直接他人の目に触れることがないからだ。傷ついた彼女を特定の場所へと移動し、救急隊を待つ方法が安全、と答えを出したのだ。しかし……

(公衆電話の場所が特定されるのは仕方ない。それも知り得たことだ。もちろん指紋も残さず声色も変え、さっさとずらかつてしまえばいいことなんだ)

だが、その手法を遂行するには一番重要な問題が残っていた。救急隊が到着するまでの時間だ。美咲が刺されてから相当な時間が経っている。命の灯火が消えかかっているのは一目瞭然。厳然たる事実だったから。

何かを善しとすれば、何かが悪しとなる。何かが足されれば、何かが減る。すべてはいたちごっこであり、堂々巡りが人智の限界。もしこの世に絶対という事象があるならば、それは人の憧れが生み出した確固たる意思の概念でしかない。彼はそう思っていた。

彼は考えあぐねた。そして思考を極限にまで活用した。あの標的となる者と相対する時のように、命を賭けて闘いあっているときのように脳内のあらゆる部分を発火させた。

（最良の策を……。少しでも最良の策を……）

その瞬間、脳内が凄まじい演算をし始める。そして、彼の脳内は幾筋。幾通り。幾百万通りの光が駆け巡る。常人では計り知れない世界が渦巻いてゆく。すべてが、すべてがうまく行く方法を……。いや。せめて、せめてすべてが元通りになる方法を求めて。

全身全霊の凄まじいものが辺り一帯に轟いていた。聴こえているのは降り止まぬ雨が路面に叩きつけらる音だけ。しかし、それ以上の振動が彼の体を包み込んでいた。夜の闇に幾筋もの雷が打ち下ろいかすちされているかのようなだった。あたかも巨大な黄金の竜が地上のすべてを巻きつくすかのような勢いがあった。

なのに。なのにどうしものか。彼の思考は意外な答えを出したのだ。あれだけ身魂を注ぎ込んだにも拘わらず、思わぬ場所へと行き着いたのだ。

（そ、そんなばかな。そんなばかな……）

答えはたった一つだった。行き着くところはたった一つしか得られなかったのだ。美咲の命を救い、己の日常を崩さぬ方法が、彼の全身全霊もってしても、ほんの、たった一つしかはじき出されなかったのだ。

（お、俺はあの時、どうかしていたんだ。どうかしちまってたんだ……）

正太郎はあの晩の回想を止め、齒軋り混じりにはにかんだ。そして疲れきった表情でじめじめとする木目調の古びたカウンターに両

肘をついた。うな垂れた。勢いで背広の袖口がぎゅっと引つ張られる。彼の逞しい両手首、そして両こぶしがぬつと露わになる。彼はそのこぶしの一番硬い部分で額をゴツゴツと何度も強く叩いた。

（なあ、美咲ちゃん。あれで良かったんだよなあ。なあ……）

正太郎は彼女に問いかけた。しかし、目の前に浮かび上がった彼女は何も答えてくれなかった。

彼が頭を叩く振動でグラスに注がれた冷たい水が小さな波を起こした。ちゃぷんと音をたてて絡み合った。浮き上がった氷がこすれ合い、カラカラと音をたてて揺れあった。

ぎゅっと目を瞑るとあの晩の光景が鮮明によみがえってくる。あの時の息づかいまでもが同化してくる。

なあ美咲ちゃん、なあ――

彼は目眩いを起こし、とうとう息が出来なくなってしまった。

あの時――

少女美咲の制服は血にまみれていた。

生温かい液体が背中の中の傷口の辺りから止め処なく流れ出していた。一度は収まりかけた出血も、また勢い増し始めている。正太郎は迷った。あれをやれば美咲は助かるのではないか。あれをやってみる価値はあるのではないか。彼は、美咲のぐったりと力ない体を愛車の助手席に腰掛けさせると、右手を彼女の首筋に置いた。

死の概念自体を消してしまえばいい――

それが彼女を助ける唯一の方法であれば、と彼は思っていたのだ。いや、それこそがたった一つの答えだったのだ。

しかしその方法は無謀な賭けでしかなかった。彼はまだこの方法を試したことがない。彼の“思考”への潜入は死への呪文そのものを“生かす”ためものではない。後にも先にも“生かした”ためがない。間違つて死なせてしまったら……元も子もない。

常々、“死の概念”を取り払った人間はどうなるものだろうか、

と考えていた。不老不死。常態延命。いにしえの頃より現実、幻想問わず膨大な人々によって思い描かれてきた永遠の錯綜だ。だが彼は、それを試す力があるにせよ実行するまでには至らない。

俺はそれほど傲慢ではない――

正太郎は口の端を上げ力なく笑った。彼によって彼にしかない有り余る能力。そんな尋常ならざる能力を、自らの興味や都合だけで試せるわけがない。いわばこれは強制的な人体実験そのものだ。時間という留まる事のない永遠の檻の中に鎖で繋がれた人体標本。そんなものを作るのは趣味じゃない。やるべき事じゃない。

気がつけばポタポタと意味の分からぬ汗が一筋、二筋と滴り落ちてくる。

だが彼女をよく見る。刺された直後から意識を取り戻した様子がない。脈も弱くなり体温も下り始めている。まだ太陽の温かさも激しさも、一緒にたにして容易に取捨分別などできぬ若葉。その生命が無残に散ってゆくのを黙ってみているわけにはゆかない。ただ指をくわえて見ているわけにはゆかない。そうさ、彼女との約束も果たせないまま、このまま手をこまぬいているなんてできるものかよ。正太郎は冷や汗が滲む濡れた手で鼻先の横を搔いた。ええい、やってみるさ。なんとかなるものさ。

雨粒が愛車の幌を強く叩いている。バラバラとまばらだった音がドロドロと分け目のない四連符の連続音に変わってゆくのが分かる。剣で刺された無数の穴から雨雫が流れ落ちてくる。

こんな雨足の中でも“やつら”の炎は黒煙を上げ燃え続けている。この少女の命にあれほどの勢いがあれば……、と彼は思った。正太郎の右手がためらいのためか、とまどいのせいか震えている。もし彼の思惑が的外れの方角に進んだなら、悪い方へと転げ落ちてしまったなら……彼女は間違いなくやつらと同じ運命にたどり着いてしまう。ひどく悲惨な死に向かってしまう……。

キミの炎は何色なんだ――？

彼は、何をしようとまったく反応のない美しい少女の首を持ち上

げた。震える右手がそろそろと少女の首筋に添えられる。

（ええい、ままよ……地獄などあるものか。やって出来ないことなどあるものか！俺は正太郎、負けるものか！）

死の概念を消し去る。死への機能を消去する――

まさにその時、正太郎の意識が美咲の中に潜入していったのであった。

第一部 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4624d/>

憤悶のアリアドネ

2011年8月6日03時23分発行